實語教童子教證註　完

教育
E09

10050
教科書文庫
1
101
10-1816
2000
302390

KODAK Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Inches Centimetres

教育学科

振鷺亭先生著

實語教童子教證註

東都書林　五書堂合刻

広島大学 教 64306 図書

實語教注序

實語教者空海大師所作也師嘗著乎秘府論三教指帰而彼書與斯書稽査之則文義甚劣恐是有偽書歟云説雖然諱述之則爲其語也引出策一萬巻蒐輯乎經傳之格言且攈摭乎佛典之要説豈可爲淺近之語則何以有毛敎於第世也實是大術擁化之寳典也蓋其至意之敎学道流爲進道之一蹊子者也旹文化丙子春正月中浣

振鷺亭主人撰

凡例

○此書江湖に流行ところの數本轉寫相屬す其疵謬何これか怪むに足らんや然ども世本は誤り甚しきものあり於是予本文の出所を考索して文法の顛倒文字乃差錯章句の悉ことを挍正すつしぬ。

○蓋字學者流文義を釋さるの誤改どんば二教をと學侶乃述作なり故に大抵諸經論釋義等に據且經傳子史の要辭を取ところ其儒書なるところは漢語を以し。其佛語なるところは呉音を以て訓讀交ちさるを混ず。幼童會易んが爲に。平假字をもつて諺解し。援引れ書また證をべき語のことを擧繁へ恐て省畧し間亦巳が意を附してこれを補ふ

○此篇巻を開ば浅近繋讀するところは深長其敎儒佛に渉る予は其兩端を叩て竭そ唯初學の子弟をして博く學を勤めさんが爲に儒佛の道理を辨すまれ註解の旨趣耳

訓點讀方

此章は五言を以て句と爲す梵書伽陀れ一體なるものをよむ者五字づゝに句頭かきりて讀むべし但世に行る板本校合康略にして章句の轉倒文字の差錯あるを今ことごとく改正しされば童子等專本書の白文を以て誦讀し闇記して誤ることなかれ頭書の反點を直に讀ふに假名を以て訓點を附しは遺忘の時の便に備るのみ

實語教諺註

江都 振鷺亭貞居 著

此書名ばかりて實語教といふ。大般若經巻第四百五十七の實語品より出る。又法華經従地涌出品に我今實語を説汝等一心に信せよとあり金剛經にも如来此實語者真語者といへり涅槃經巻第二十七に正語實語時語といふの類語このことゞくの佛說なり

實と語との二義なり。敎は倣なり論なり空海大師天下後世の童蒙をして敎ならはしめんがために斷書を作るとなり

○予標題れ下に講釋の二字を加ふ句端に講釈は和解なりとあり尹子曰学少講而後明とあれば本文を註解する事をさとし

山高故不貴以有樹爲貴

人肥故不貴以有智爲貴

山高が故ニ貴カラ不
樹有を以て貴とす
人肥たるが故ニ貴カラ不
智有を以て貴とす
富ハ是一生の財
身滅すれバ則共ニ滅す
智ハ是万代の財
命終れバ則随て行

山ハ高きよりとて木のなき山なるときハ貴からず 木なきその山ハ樹木ありてこそ薪ともなり材木ともなりて人間の所用にもなる 人ハ肥たるのみにて貴しとせず 人をそのごとく宍のミ大ひに肥たり共 能もなく無智者ハたつとぬべきにあらずと諺にいふ 放飯流歠の徒なりとて人ハ智あるをもつてたつとぬべし その智乃あきらかなるより仁義禮智のみちもいでくるものなり ○大学曰物格而后智至智至而后意誠とありて万物をおさむるものハ智なり 荀子曰是是非非謂之智とて智ハ事の可否をわかつものなり 儒道にハ五常の次第の仁とさだめし 佛道にハ智をもつて第一とするごとく 元亨釈書の智通論にもくハし

富是一生財身滅則共滅
智是万代財命終則随行

富とハ金銀衣食に足るをいふ 富ハまことに一生とともにすたるの財 その身滅すれバ財宝ハ則きえうせるがごとく共にほろびゆく 事ハなくならぬぞ 智ハまことに万代の財にて尭舜禹湯文武周公孔子などの今乃世までもその智徳をたもちて聖賢の名をのこし給ふがごとく この智徳あれバ命終るとも ゆくすゑたりて他の物ともなり 白楽天ハ金ハこれ財にして終にあらずして ゆくぞとたり 智ハまことの宝にて赤宝後にかへらず 佛国に生まるといふもかるが如くの財宝なかろうし 智慧残おもんばかるの対句に出せるなり

随て行

玉磨不バ光無
光無とき石瓦とす
人学不バ智無
智無とバ愚人とす

玉不磨無光無光為石瓦
人不学無智無智為愚人

玉ハもとと光ありて石瓦とおなじきものなれども 瀬くるに磨かれ玉れ光とあるハもなき人をそのごとく 智ハ本来人々個々れ本心にそなへたるところなれども学問乃みがきをなさゞれバ智恵のひかりを発せぬゆゑに石瓦にひとしき愚人なりそのまゝ残人学ばざれバ智なし 智なきとバ愚人とまとふなりものゆゑに学文乃修行をしてみがくがごとくぞ ぐかごとくその躬より玉のひかりを

倉の内の財も朽る事有
身の内の才ハ朽る事無

千両の金を積むと雖
一日の学にハ如ず

ごとくなし○禮記学記篇曰玉琢ざれバ器と成ず
人学ざれバ道を知ずとあるもこのこゝろなり

倉内財有朽　身内才無朽

倉れ内にあるくらおく金銀財宝ハいくたびもちひれバつゐに
ときまつてやぶらせることありうちにおさめおく文ハ
朽ることなし身乃内にそなへたる才智なり学文成就したる才徳ハ
ときに身乃財にしてのちくまでも朽ることなし○孔子も富ハ屋を
潤し徳ハ身を潤すとのたまへり韓文に金璧ハ重宝といへども費用
て貯儲がたし学問ハ身に藏身在バ則餘りありといへり

雖積千両金　不如一日学

千金万金を積むよりも一日つとめて学文の功をつむべきなり
学問の功をつむときハ一寸の日も一分の光陰とおしみて怠
ることなくへき事なり○淮南子に聖人ハ尺の璧をとうとばず
て寸陰をおしむとあり

兄弟常に合ず
慈悲を兄弟と為す

財物ハ永く存せず
才智を財物と為す

四大日々に衰へ
心神夜々に暗し

兄弟常不合　慈悲為兄弟

兄弟骨肉の中をつねにおさまらず和合せねばそのおやなれ
ども兄ハ弟をあなどり弟ハ兄をうやまハず争ふことありて
和合せざる事あり兄弟むつまじくて慈悲あるをもつて慈悲
とハ字彙に慈ハ心柔なり愛なり悲ハ慼なり惻なり痛なり
○左傳に意合ときハ呉越も相親み意合ざるときハ骨
肉も讎敵となるといふもこの事なるべし

財物永不存　才智為財物

財物とハ金銀衣服のるいをいふ永く存せずとハいつまでも
たもちがたくうしなふことあるものなり
うちにそなへたる才智ハ万代不易の財物にして世の
まなたくふかくその身の重宝とすべしとなり

四大日々衰　心神夜々暗

幼き時に勤学せざれバ老て後に悔といへども尚益ある所有ことなし

四大とハ佛説にいふ地大水大火大風大なり人乃五躰六分ハ
みな地水火風の四ツをかりて成就するなりこの四大おのく
わかるゝときハ妄身ともにほろぶるなりくべきなりと円覚経に
説り心神とハたましゐの事なりこの四大をもつて人間のかた
ち成具足するものゆゑ年さかんなる時ハ四大和合
して心神さかんなるゆゑ無病そくさいなれども年のよるに
したがひてこの四大も日々におとろへ夜々に暗くなりゆくそれに
よつて根気さかんなるときに学問をはげめといふ意をふくめり

幼附不勤学老後雖悔
尚無有所益。

幼時とハ人むまれて十歳
なるまでを遊ぶとのみおもふ礼記の
曲禮に日く人むまれて十年を幼といひ学ぶとあり又小学の序にも人うまれて八歳にして
楽射御書数の法をならはしむるなるべし小学に入ると云
なるべく幼時に学問せざれバ無学文盲の者となつて人にあなど
られ一生のあいだ年おひてそのみにかへらず学びがたくおもへり

書を読で倦ことなかれ学文に怠る時なかれ
眠を除て通夜に誦せよ
飢を忍で終日習へ

師に会といへども学ばざれバ徒に市人に向が如し

おのれいぬせく後悔すとも益なし○司馬温公が勧学歌
小汝等各早修せよ老の来を待て徒に自悔することなかれとなり

抜讀書勿倦学文勿怠時
除眠通夜誦忍飢終日習

故に夜ハ寝ずにねむりをのぞきてとよみてハなり
くりかへしよむべしとなり学文の修行ハ万時と倦と俗にいふべく
なり通夜とハ日のくれよりあしたまでをいふ飢と忍でとハ
夜ハねむるべきものなれどもねむらず書をよむべしと
食物のむまきをもおもはずおもひきる事なり終日とハあしたより
ゆふべまでいつまでもそのとほりの四句ハ学文を怠ることなかれの意
我いましめてのたまふ○小学曰朝ハ益し暮ハ習ひ心を我小る
して翼々と于此と一也て懈ることなし是を学則と謂ふ

雖會師不学
徒如向市人

習讀と雖復不バ只隣の賊と計がごとし

君子ハ智者と愛し小人ハ福人と愛す

雖習讀不復只如計隣賊

揚子方言に師とハ人の模範なりとありて弟子たるの師匠にまなべどもなぐさみがてらのことくとうく学べどもその義理を
おきてらめる事をもろくして従ふことをせず八幡中まてあるね人に
むかひあてるごとくなんの甲斐もなき事なり

論語に学でわかハざるときハ罔と、りその道にくらくみるひよむ
なりまでハ道にくらくしてまどふ事を只ひとへにさまかへさふして行ひふとその
ことをれハ一匹傲とハなぞらえてよむとなり論語に南容三
白圭を復すとあり、これなりその義理が一つなてハからぶるその
身するなんの益もなくむなしく只隣の賊がかぞふるが匹
となり○天台大師云日夜に他の宝を数て自半銭の分
なしまた華厳経たよび小止観等にこの語ありとなりの宝
我がなれるとハ益もなきことの譬なり

君子愛智者小人愛福人

冨貴の家に入と雖ども財無人の為に猶窓の下の花のごとし

君子とハ徳ある人位にあるといふなり小人とハ道をしらざる愚
なる人乃をなり君子たる人ハまごころに私欲なく道徳をこの
むゆへに智ある人をさてうやまふし小人ハまゝ私欲ふかき
ゆへ福人をみてハおのがこころにたのまんと金銀をおもんじ
て志たしみよるなり○論語曰君子ハ徳を懐ひ小人ハ土を
懐ふ君子ハ刑を懐ひ小人ハ恵を懐ふ

雖入冨貴家為無財人者猶如窓下花。

冨貴とハ董鼎が孝経大義に財足を冨といひ位
あるを貴といふとあり冨貴の家に入といへども財なき人ハ窓
のしたにある花のさかりなるごとくなりかく解して有ば此句
為の一字わかりやすからず愚按るに前句に小人ハ福人を
あいすといふて冨貴のいゑに入といへ共されバ財なくして
義をまもる人乃因にハ冨貴の家ハ霜下にて花よりをとれる
まかりなく足ゆるなり孔子の不義にして富且貴ハ我に於て

貧賤の門を出ると雖ども智有人の為ハ宛ら泥中の蓮のごとし

父母ハ天地のごとく師君ハ日月の如し

浮る雲のごとしとのたとへ不義の富貴来るとも久からず倏して尾溝の霜の如しとの事なり○白居易が詩に

雖出貧賤門為有智人宗。

宛如泥中蓮。

皇侃が論語の疏に財なきを貧といひ位なきを賤と

いふとなりいふこゝろハ貧賤のまづしきいゑよりいでたりといへども智

ある人ハこゝろきよくしていはゞ蓮花の泥より生じてそのけがれ

にそまずして瀞浄なるがごとしとの蓮ハ花中の君子なるゆへに

周孟叔などもとの事愛せり○禅恵空が抄書に此両段ハ

ふかく意味ありとて四十二章経云曰吾沙門と為て濁世

に處す當に蓮花の泥の為に汚されざるが如くなるべし

父母如天地師君如日月

天ハ陽として万物を生じおほひて一さいその下にありて

よく生長するゆへに父の徳とそなへたりかるがゆへに父ハ天なれ

親族ハ譬バ葦のごとし夫妻ハ猶瓦のごとし

ば也又地ハ陰と躰としてしよくぜんぶつをそだつるおしえにて

みて生就するゆへにこれ母の徳なるがゆへに母ハ地のごとく

なりまた君として父母ハ天地のごとしとのいひ次にいへる師ハ師道

ある人なり君ハ主君といふなり君の字ハ説文に尊なりと訓

ずれバかくのごとくなるおもきこゝろなりこのゆへに師と君とを日と

月にたとへてたふとむべしとなり○易曰乾ハ天なり故に

父と称す坤ハ地なり故に母と称す揚子法言孝至篇云

父母ハ子之天地與天なくんバ何ぞ生ぜん地なくんバ何ぞ成ん

親族譬如葦夫妻猶如瓦

親ハしたしむともむ族ハたぐひなりとなへて一門一族のことなり

まへにいふ父母師君のおもきにくらぶれバ葦の皮のうすきごと

くなれどもそのこゝろの夫妻ハ身と瓦の縁といふを瓦ハいやしき

たとへなればかく卑下してのたまへり○書言故事に親戚の類と

葭莩の親とのふを漢の中山靖王のことばよりいでたるところなり注に

葭ハ蘆なり莩ハそのうすき皮なりいたつてうすきことのたとへなり

父母には朝夕に孝せよ
師君には昼夜に仕よ

父母孝朝夕師君仕昼夜

父母にハ朝夕に孝せよとハ定省の孝といふなり孝とハよく父母に従ひまつるといふと爾雅に見えたり定省とハ礼記曲礼上篇に出たり人の子たる礼ハ冬ハ温かにして夏ハ父母の内をすゞしくし昏ハ其ゆかを定めて晨ハ省みるといふ事なり是を定省といふ朝夕に孝せよといふて次の句ハ師と君とハ昼夜のいとひなく従ひまつるべきとの事なり父と師と君とハみな人のよりて生るところなれバ死をもつて報すべし此段ハ父と師と君とに従ひまつるとの三ッ説なり○晋大夫欒共子曰民ハ三に生ず之に事ること一の如くす父是を生じ師是を教へ君是を食ふ父にあらざれバ生ぜず食にあらざれバ長ぜず教にあらざれバ知らず生ずるの族なり故に一に事つる唯その在るところにして則死を致すと云ゝなれバその従ひまつる事のおろそかなるべからず

友と交て偽ふ事勿れ

己より兄には礼敬を尽し
己より弟には愛顧を施せ

人として智無きは
木石に異ならず

交友勿偽事

○友とハ志を同じくしむ人をいふなり友と交るにハ信を専らにしていつはりをいふことなかれむつましきを断金の交とハ易の繋辞に二人同心の言ハその臭ひ蘭のごとしとあり○孔子も晏平仲善人と交久しくして是を敬すとのたまへり程子の註に人交久則敬衰ふ久而能敬をを善とすといふ

己兄尽礼敬己弟施愛顧

是れより兄たるものハ礼義をもつてうやまひ己れより弟たるものをバあはれみかへりみるべし他人なれども十年もまされるものハ兄のごとくにうやまふべし其うやまふ心なくバ我をもうやまふものなきとしるべしとて礼記にもみえたり
○字彙に愛ハ憐なり顧ハ思念なりとあり左傳にも兄愛弟敬とあり六親のみならず

人而無智者不異於木石

人として孝なき者は畜生に異ならず

三学の友に交らずんば何ぞ七覚の林に遊ばん

人而無孝者不異於畜生

人とむまれて孝なきものハ木や石のやうに無心なるものにおなじ
されども学問もせず智慧なきものハ木や石にもおとれる
ことに又人とむまれて二親に不孝なる者ハ畜生にもおとれ
るなりさればや烏ハおやに反哺して恩を報くる鳩ハおや
鳥より三枝さがりておやをうやまふとなりされバ人の子として
不孝なるハ禽獣よりもおとれり ○ 白楽天が人木石にあら
ず皆情ありといひしを人たる道とさとす然バ木石ならず善導
大師も恩孝を行はずんバ即畜生と異なることなしとのべ

不交三学友何遊七覚林

此段ハ佛説なり三学とハ戒学定学恵学これ三つをいふなり
佛の道ハ法とおんとおの大小の戒定恵の三つをまなぶなれバ
出離ハあらざれバ三学といふなりくはしくは翻訳名義
などにあるべし七覚とハ梵語にて菩提といふことばなり

ゆへ七菩提分といふ一つにハ念覚二つにハ択法覚三つにハ精進
覚四つにハ喜覚五つにハ軽安覚六つにハ定覚七つにハ捨覚なり
くはしくハ阿弥陀経の疏抄などに注ありいま本文の心[illegible]
この三学の修行するを友にまじはらずして八七覚のこと
をしるまでかなはずといふことなり林とハ文勢にて山林に
入て友人とあそぶにたとへていふなり

四等の船に乗らずんば誰か八苦の海を渡らん

不乗四等船誰渡八苦海

四等とハ慈悲喜捨の四つといひ四無量心ともいふ楞伽経に一
にハ字等二つにハ語等三つにハ身等四つにハ法等となりいさゝか
かとけのおもひハ慈悲喜捨の四つとも等きゆへ四等といふ
四十二章経および華厳経にみるところ四等とあり次にいふ
八苦とハ涅槃経にいはく一つにハ生苦二つにハ老苦三つにハ病苦四つにハ死
苦五つにハ恩愛別苦六つにハ所求不得苦七つにハ怨憎會苦八つにハ
五陰盛苦なり本文の心ハ四等の修行を船にたとへ八苦を
海にたとへての慈悲喜捨の平等の大船にのらずバなどか

八正の道廣と雖も十悪の人ハ往不

無為の都八楽ありと雖も放逸の輩ハ遊ず

老たるを敬ハ父母のごとし
幼きを愛するハ子弟の如す

我他人を敬バ
他人亦我を敬ふ

人間八苦の生死の海をはなれてうかむべきのをしへ
みちよりてくるしみをまぬかれ楽をもとむる事といふなり

八正道雖廣十悪人不往

八正とハ大品經にあるる正見正思惟正語正業正命正精進正念正定これを八正道分といふありくはしくハ四教儀集解に注このまへ乃段の七覚とこの八正を修行するがすなはち佛の道なり十悪とハ四十二章經に身三口四意三とあり身に三つとハ殺生と偸盗と邪淫といふ口の四つとハ両舌と悪罵と妄言と綺語とあり意乃三つとハ嫉と嗔恚と愚癡となりこの十悪ハ往くことの八正れみちひろくしてまよふまれどもゆくことハあたはずとなり

無為都雖樂放逸輩不遊

無為とハ梵語に涅槃といふなり華厳經の疏に為ハ作なりはからふハち生滅なりとありまされバ無為とハかすでに

といふ義なり為とハまよひの生死といふその生死有為のせかいをはなれて彼のむねの都にいるかさとりなりこのみやこハたのしみきはまりなしといへども放逸とてあしき心のままにほしいままに悪事をはたらくものハ遊ことなしとなり

敬老如父母愛幼如子弟

年おひたる人をみてハ他人のことをさだかにもやうやまふようにせよとこの孝經にも親を愛するものハ敢て人を悪まず親を敬するひとハ敢て人を慢らずとありまた十きにせんどのいとけなきものをば親類においてハふくしてわが子や弟とおなじくむつまじくよいつくしめとなり論語に孔子このことを子路にのたまへり〇孟子曰吾老を老として以人の老に及し吾幼を幼として以人の幼に及さバ天下を掌に運しつべしとあり本文のこころよくかなへてあらバこの二句の文ハ天下国家をも治むべし

我敬他人他人亦敬我

己人の親を敬ハ人亦己が親を敬ふ

己が身を達せんと欲する者ハ先他人を達令よ

己敬人之親。人亦敬己親

家語に賢君篇に人を愛すれバすなハち人これを愛し人をにくめバすなハち人これをにくむとあり孟子を此と知。これハ人の親を愛敬す人亦其親を愛敬すといへる本文のこゝろとおなじ仁ある人ハ人をあいするものなり禮あるものハ人をうやまふものなり人をあいすれバ人もまたあいをなし人をうやまへバ人もつねにこれをうやまふなり仁義の法なり○朱熹曰親を愛し兄を敬し君に忠ある長に弟なる是を孝弟と兼といふことをおしゆるこゝろなり

欲達己身者先令達人

己が身のうへを達して立身せんとおもふものハまづ他の人のうへをよく立るときハおのが仁の道成就するゆへに人よりまつりあれとしてもてそんじるなり家語に富をもとめて人と富すそのハまづしうらんとおもへとぞそまづしうらねのなり貴ときもそ人が云うとくそるりのハかやしうらんとれとへるといひくるしねとそのなり達がもてよく人が達するそのハ窮せんとおもへとも窮せねとのことなり○論語に夫仁者己を立んと欲して人を立己達せんと欲して人を達すとあるもこれなり

他人の愁を見てハ即自共に患べし他人の喜を聞てハ則自共に悦で

見他人之愁。即自共可患

聞他人之喜則自共可悦

此段ハ註釈をまつずきとへるをみれバ本文が反して見るべしおのからせ世人の情人のうへにあしきことあれバおのれとわてまてよろこびよきことあれバそ嫉みそねむなれど是人のうへひなりあはれみかなしむ事を憂を喜も人と共にするが人たるの禮義なるべし○論語に子是日に於て哭すれハ歌はずとみえこれも他人のうれへハわがことゝ思ふなり又子人と歌て善ときハ必これを反せしめて而後これに和すとあるもそのよろこびをともにしたまふなり

善を見てハ速ニ行ひ悪を見てハ忽ち避よ

善を修る者ハ福を蒙る譬ハ響の音ニ應ずるが如く悪を好む者ハ禍を招く宛も身ニ影の随ふがごとし

見善速行見悪忽避

人乃よきことをなすをみてハおのれもすみやかによきことを行ひ人の悪事をなすを見てハすぐさまそのところをのがるべしとなり

○論語ニ曰三人行ときハ必我師あり其善者を擇で而これニ從ふ其不善者をバ而これを改む

修善者蒙福譬如響應音
好悪者招禍宛如身随影

よきことを修行するときハ福報をうくることたとへバひゞきのおのづからその音ニおうずるがごとし又悪をこのむ者ハかならずわざハひをまねくこと身ニそふかげのごとくさらず 繹家畢澀經ニ善を施せバ福追悪を為バ禍響の声ニ應じ影の形を追ふが如しといへるもこれなり ○虞書大禹謨ニ安国が註ニもこの類の語ありてくわしく略す

富めりと雖貧を忘る事勿れ貴しと雖も賤を忘る事勿れ或始ハ富で終ニ貧く或先ニハ貴くて後ニ賤し

夫習ひ難く忘易きハ音聲の浮字也

雖富勿忘貧雖貴勿忘賤
或始富終貧或先貴後賤

明心宝鑑ニ太公云已を貴として人を賤とすることなかれ自大なりとして他を小なりとすることなかれ財宝ニほこるときハなかなか富とするべし又位たかき人乃いやしき人をもかろしめざるハ上にたつ人のつゝしむべき次の句乃あるひハはじめハとみてもおひにハまづしくなるあり又ハさきニハたつとくもいまへいやしくなることもありそれ貴賤貧福ハ休ゐあるべからずいまあるのちをもおもふべし

○易ニ君子ハ安而危を忘ず存而亡ことを忘ずとみへたり盛衰ハ寒暑乃かハるがごとし

夫難習易忘音聲之浮字

又学易く忘難へ書筆の嗜藝

但食有バ法亦身有バ命

有農業と忘不学文と廃る事莫

又易学難忘書筆之嗜藝

声ふ出し読法まてうちたふるとハなかなかむづかしくして覚えをき
まやうとききことのなりかたきハ音声の済る才といふなり又それゆへ
けいこするときハやさしくてのちまでとおぼえすまぬものハ書筆の嗜
藝とてこの外かく道々の嗜藝とハそろきき藝なるとかいふ事なり

但食有法亦身有命

食とハ朝夕の食物なりその食ふ法ありとあそれぞれ乃
身ふ応すべき所作れ法ありて世をおくりその食ふようて
身が中ふあひ命をたもつなり人ハ身命がだいじの世の
なかのハなくまた身中ふある法ハ食をわするゝ事あり
食とりふるハ世をわたる法ふあり猶農行を忘れざれとハ
耕し芸して五穀の實のることなきやうふおもふべからずと

不忘農業莫廃学文

しとゆう一切生民たる農乃ちかうありてそのほかゆくふ士農工商の
四民のならひを農と士のつぎふおなじつぎの句ふ学文と
廢するなかれとハ学文ふなりゆへハ学文
の道ハ家と齊へ身を修る道なればいづれの人なりとも怠る
われなるこなくの食物をとるがごとくふおのれの道ふまつて
農行と学文と對句ふ出せるハともふ天下の重宝なればなり

故末代の学者先此書を案すべし

是学問の始身終まで忘失すること勿れ

故末代学者先案此書

前文をうけて故ふ末代乃学者とハのちちく乃代の初心の学者とハ此書とハこの實語教
学文の道をろく儒書ふハ聖賢の經典諸史百家乃書
とかしかるず佛經ふハ諸經論歴代の釈義とうふくゑし
くときおよされども初心のともがらにハふかきに會しがたき
かどふまづこの實語教を思案せよとなり

是学問之始身終勿忘失

是とハ去乃實語教のさとそいふふハあらずこれ学問の始として身の終まで一生のあひだ聖賢の教を忘れ失ふまじとなり○論語曰子路身終まで是の道を誦す謝氏が註ニ云子路が賢さに止まるべしとあるを身終まで誦すをときハ日新に進ゆへんふあらず故ニ激して是の進むとかりらるをとつてみれバ初学の者此書をたしかとして日新ニ志を激して学問ニ進むべきことのなり

實語教 終

童子教證注

江都 振鷺亭貞居 著

訓點讀方

矣 此字ハ助字にしてよまざる字なり又ときとしてよむこともあり篇中ニ此矣あり

図 とめてよむことなし初学の者よくこころへて読み得べし

夫 丈ニ助字あるハ禮ニ儀ニ所の楽を相あるが如し禮儀をうけとハ行ハるゝ楽相なりされバ諸にも丈ニ助字なりされバ須るらずすなハち文句のそれぞれニ用ゆる所の字なりとしるべし

此書題して童子教と名づくるとハ廣韻ニ童ハ獨なりといふまだ冠せざるものの名なりとしるせり説文ニいまだ冠を加へざるものの名なりとあり又十五歳まで八年をもつて童といふ加冠する禮ありそのよし禮記ニみへたり釈名ニいはく十五歳を童といふなりゆへニ禮ニ陽童あり牛羊の角なきを童といふ山ニ草木なきを童といふとみへたり童子と梵語ニハ拘摩羅といふ漢土ニて八童子といふ和訓ニハ仮子とのふなりさきニ教とハ王篇ニ教令なり論なりとなり教令のときをも人ニいひきかせて下知をなす意なり論乃字訓ハ此意なり斯書をかきて童子ニ教るの義なり一本曰五大院安然和尚洛陽ニ居住せしとき童子のあまたのぼりて手習なときさせ書をよませしへくひさしく年月を経るかどふ

夫貴人の前に居てハ顕露に立ことを得不

道路に遇てハ跪て過よ召事有バ敬て承れ両の手を胸に当

あるときこの書を作りて童子等によましめたまひし乃ゆゑに童子教とぞ名づけしとなり

夫貴人前居　顕露不得立

夫とハ発語のことばなり貴人とハ位ある人ぞなどいふ事なりかならず我さうとぶべき人をさしていふなり顕露とハあらはなるところなり父兄主君師匠などの前に居るときハかしこまりて立ふるまふ事をせずかしこまりてよくよく礼義をまもるべしこの礼法を弱るハ人の人たる所以なれバ先かつてんなくきをつけてせるなり

遇道路跪過　有召事敬承

両手当胸向　慎不顧左右

不問不答　有仰謹聞

腰て左右を顧不れ問不ざれバ不答仰せ有バ謹て聞

三宝にハ三礼を尽し神明にハ再拝を致せ人間にハ一礼を

まへにいふ貴人に道にてゆきあひまいらせバひざまづき礼をなしてすぎゆくべし貴人乃召よびたまふ事あらバいかにも敬ひてその事をうけたまはれ両の手を胸に当て向ふときハ左右の手をあはせてその貴人の方へむかひ心をつつしんで左右をかへりみてよそみなどすまじきなりまたよきことあらバ人のとはれたるときバこたへよかりそめにも問たまはぬ事をいふべからず又何事にても仰あらバ謹で聞べしとなり○礼記曲礼篇曰先生に道に遭バ趨て正く立て手を拱く又云凡奉者ハ心に当つ又云問されバ敢て対へず又云問ときハ終て対とあり是らの語によりて礼義作法とのへるなり

三宝尽三礼　神明致再拝

人間成一礼　師君可頂戴

三宝とハ仏法僧の三つをいふなりこれを宝といふそのゆゑハ仏ハ人中乃宝なり一大蔵経などハ仏法の宝なり僧の戒行

成
師君とハ頂戴
す可

ふでおきハ僧の宝なり宝性論などの中にくはしくいへるなり
三禮とバ又三拜ともいふ出家の三拜ある事ハ身と口と
意と三業をそうやまふ相をあらハすなり智度論にも佛法ハ
心が本なり身と口とをバ末とするがゆへに三拜をなして禮乃
かぎりとするなりつぎに神明とハ佛家よりいへば佛を本地
とし神を垂迹とすこれを和光同塵といふて両部習合
の神なり一説に三禮再拜ハ本地と垂迹とのかたちなり
といへり唯一の神道にてハ禮拜の時ふたゝび拍手をうつ
ゆへ再拜といふ神ハ天地の二氣なり人も陰陽の氣をもつ
て生るゆへ二氣をかたどりて再拜するなりいまいふ乃
童子教のうへにてハ佛神を崇る事なりとみるべしあるひハ
三禮三拜の次第と沙汰するハひがことなり次に人間
にハ一禮とあるせとハ通途のれいなり又師匠君主にむかふ人
とバ頂戴して是がかうべにさゝげいたゞくかたちなりやまふ
ぞしきりかくおもんずると九拜三拜再拜といふなり經に
中小佛足頂禮とあるもこのことなり

墓を過る時ハ則慎め社を過る時ハ則下よ

堂塔の前に向て不浄を行ふ不可
聖教を上に向て無礼を致を

過墓時則慎。過社時則下

墓ハ人乃霊位とおさむる所なれバそのほとりをとおる時ハ
無禮となさずはゞかりうやまひてすぐべしとなり又社とハ
神社神をまつるところなり本朝にて所々に鎮坐する処の祭
神あらそのいのりのべまたそのまへをすぐるときハ馬のり
ものよりもおりて禮をなして通るべし○禮記子路曰吾聞
墓を過るときハ式社を過るときハ下といへるハこのことなり

向堂塔不可行不浄
向聖教不可致無礼

堂塔とハ葛洪が字苑および切韻に塔ハそとばにて佛の堂なり
佛の塔廟なりとあり不浄とあるハ大小便利のさぶらひみだり
にたれ流して佛閣の辺をけがすべからずとなり優婆塞戒經王
經に伽藍法界内地大小便をけがせバ五百生抜波地獄に

可不

人倫ニ者禮有朝廷ニハ必法有人として得者充中又道

睦とあるもて徳なり聖教とハ佛かさう等の教といふなり
儒道とそハ大聖人孔子のとき教とさして聖教といふべし
いばまでと聖教のまへふむかひてまで残よむときハちやま
ひ情くきえんで無禮といひすまじきとなり

人倫者禮有朝廷必有法

人而得志充中又道

人倫とハ天下の万民といふなり諸民禮をまもらざれバ人と
たゞひふらやまひとなせバ君臣父子夫婦兄弟朋友乃道
れのぼらおさまりて天下たひらかなり天下国家とれさわ
さまふ君ハるらず法度定規とある道あるとのぞるかゆへ
ニ禮とそよく天子のちへきまつふれころひかされて其の
法と諸侯卿大夫士庶人まで何んとするをなり上一人の
法がみだてられハ下万民もまみ無禮のとのとあるなりこれ
と人倫ニハ禮あり朝廷ニハかならず法ありといふなり又次

の句乃人とて禮なきものハ乱のもとひなり又その衆中
ニともおやまちがいできて罰科ニおちいるものなれバよく
くおそれ慎しみやうとなり孔子もその本みだして末
れさまるものハあらずとのたまへり

充ニ交て雑言不と事畢志速ニ而与事ニ觸て朋ニ遠不言語雑るとを得不

交充不雑言事畢志速而

觸事ニ遠朋言語不得雑

衆ニ交とハ人乃おほくあつまりてるなり交てハむさとその
いふをらずてバおほきハかろそひのゆるそ身をさぎハひ
おこらけるものなり家語金人銘ニいはく多言をるなかれ
多言ハおほくやぶるとあり又事畢バすみやかニされとハ
會合などの坐ニ情かろべその事おもるとれハはやく立ち
さるべ坐ニながくゐてむやのてん云ふさるまじバとバ乃あやまり
なとよりはいるハ口論とできるものとあり次の句ニ朋とふ
ハ周禮の疏ニ朋ハあはせてれやく友ハこころざしそすく

鈍多者ハ愚昧し
老たる狗の友を吠が如し

鈍多者愚昧老狗如吠友

なりとしるくたり公羊傳にいはく門をおなじうするを朋といひ志をおなじうするを友といふとあり朋も友も二字ともにともといふ字なれども親疎のちがひありされどもどちのことを朋友とよみてしたしまじはるハ何事にふれてもさからふことなくそのこころにそむかぬやうにせよとなり次に言語すなはちことばのこころにそむかぬやうにせよとなり朋のことバともに相應して和合すべきものなれバかくあるべし論語に晏平仲善人と交久して敬すとけてあしたるの人のことバ語なれバ其品をくだしといふことバにかざりなきものハ心に實なく道にそむき口にいへどもその用をなさず品をくだしといふなり孔子のたまハく君子ハ行をもってものをいひ小人ハ舌をもってものをいふといへりされバ君子たる人ハ身のおこなひをさきとしてそのことバにも道あらざる義ハいふことなし又小人ハその身にハ道をおこなふ

懈怠の者ハ食を急ぐ
疲たる猿の菓を貪が如し

勇者ハ必危を有
夏虫の火に入が如し

ことものいくロにまかせておのがあしきことをかざり道理にたがひてむやくのことバをいふなり次の句の心ハ逸物のかちかゆるハかならずしもおのれをきらひて何のやうもなきにほゆるなりといへども狗のしれひておのが主人の盗人のまへにてもわれど狗のしれひておのがとがをかざるものなり○離騒經云人ハ多言を以善とせず犬ハ善吠を以良とせず人のむやくのことバ多きをたとへたり

懈怠者急食疲猿如貪菓

けだいとハなすべきことをもせずいたづらにすごすものをいふこの怠ハおこたるぞやつねに身をもちひ家をとりおさめて朝夕の飲食におハるものなれバ是をつかれたる猿にたとへたりかれが菓を貪ていそがはしきことけだいのものゝ食をもとむるにたとへたり○出曜經云譬ば飢たる獼猴の熟菓を見るが如く身冒て荊棘に投ず

勇者必有危夏虫如入火

鈍者ハ又色ニ迷ふ
春鳥の林ニ遊ぶが如し

鈍者又迷色如春鳥遊林

勇ニ仁義の勇血氣の勇とてふたつあり仁義の勇
とハ忠節をおもひて功名をまち臣義をのぞんで命をかろんず
ますす節義ありて名をのこすなり又血氣の勇とハ心に
仁義なく智謀もなくて強きのみ命をかろくおもひ
てあらそひたゝかふことを好むをいふなり世の中に血氣の勇をこゝろ
てふなりその血氣にまかせてやるときハかならず危きことあり酒色の
勇者といふ人までも山谷が詩に飛蛾燭に赴て死禍を求
むといへるもこの事なり又鈍者ハうかつにてやすくあやまち
をもおこさずこゝろいさみに春乃鳥のあそぶがごとしとなり
これハ愚をまもることをまことのをしへなり

人の耳ハ壁ニ付く
密かにして言を洩す事勿れ

人耳者付壁密勿洩言

人の眼ハ天ニ懸る
隠るも犯用を勿れ

人眼者懸天隠勿犯用

人乃耳ハ家の壁に付てあることのごとくこゝろへてきこゆるものなれバ
おもひ人の身のうへのざんげんおしきことをいふべからずなれと
なり又人乃眼ハ天のみそなはしたまふごとくなれバかくそこと
とて悪事を犯用しるゝことなかれとおもひ人がしらずとも
を天ハたゞちにしるにきこえることあるほどに志せんと志るべし
ねとなりやうハ楊震が四知などいふもこのことなり

車ハ三寸の轄を以て
千里の路を遊す

車以三寸轄遊行千里路

人ハ三寸の舌を以て
五尺の身を破損す

人以三寸舌破損五尺身

車ハ三寸の轄にて千里の路をゆきめぐるなり
ふさびの功なりし人乃くちハたとへバ人ハ舌のみ三寸の舌
のあやまちより大いなるあやまちをおこし五尺の身をも
破損するとなり○論語子曰人として信なくんバ其可なる
をしらず大車輗なく小車軏なくんバ其何を以て之を行哉
又鶴林玉露に堂々たる八尺の軀三寸の舌を聴とかれ

口ハ是禍之門舌ハ是禍之根
口を使鼻のごとくならバ身を終るまで敢て事無し

使 この字二どよむべし

云ふ詩あり又史記の張良が世家云今三寸の舌を以帝者の師となり又索隠云舌ハ口に在て長三寸斗玉衡に象る

口是禍之門舌是禍之根使口如鼻終身敢無事

人とかく乃悪事災ひ多くハみな口より出入ところなれバ是災家の門戸にたとへて禍ひの門といふなり又舌ハその禍ひの生ずる根本なれバ災ひの根といふなりさてこの口を鼻のごとくにものいはずして居るならバ身の終るまで敢さいなん悪事ハなきものなり誠にけつしてのことバなりけりとてにしきことハましくなり行基菩薩の口は虎身を害し舌の剱命を絶口として鼻の如くせしめバ死して後咎なしといへるなり○家語云誠に能慎べ禍の根なり口ハこれ何をか傷る禍の門也とのたまへバまさしく口舌をたしなむべきことなりあひつとむべし

遑言一たび出れバ駟も追も舌を返さず

白圭の玷ハ磨て悪言の玉ハ磨難し

遑言一出者駟追不返舌

遑言とハことバのいひあやまりなりその言バ一たび口よりいづるときバたとへ駟馬をもつておひかけてもその舌をおひかへすことならずとなり駟とハもろこしにて車一乗に馬を四疋つけるをいふなり古今韻會に曰覚賢が説に論語を引ていはく駟も舌に及ずとあり按るに舌を返さずとハ文字のあやまりなるべし返の字を及の字になすべしとてみるべしといへり○劉子曰一言の失あれバ駟馬も追ず慎ずんバあるべからずといへり

白圭玷可磨悪言玉難磨

白圭とハきよらき玉の玉なきゆへ磨ときバそのきずをかくしてかくのごとくきよらかになれども人乃ことバのたつきずをハいかなるみがくともなをるなしことひとを玉にたとへたる詩経に白圭の玷

禍福ハ門なし唯人の招く所なり

天の作せる災ハ避べし自作せる災ハ逃れ難し

さらハ尚磨べし斯言の玷ハ爲べからずとあり古乃白圭の詩を南容一日に三たびくりかへしてよミし故感じて孔子その兄の子をこれにめあはさしと論語にみえたり

禍福無門唯人所招

禍も福も門戸乃外より来るにハあらず唯人乃心より善も悪もまねくなり左傳に閔子馬がこの語といへり

天作災可避自作災難逃

天のなせる災とハ水火のわざはひにあたること又旱疾をもてひでりわざはひ流行病などの人がそんずるさいはひとなりまの天災ハいつくしんとのがるるとやすきことありその身より罪を犯してうけるわざはひハのがれがたきものなりと書經大甲云天の作せる孽ハ猶違べし自作せる孽ハ逭べからずといへる語となし

夫積善之家必有餘慶矣

又好悪之家必有餘殃矣

人として陰徳あれバ必陽報あり

人として陰行あれバ必昭名あり

夫積善之家必有餘慶矣

又好悪之家必有餘殃矣

積善とハ善をほむ家なりよきことをなすハ金銀財宝をつむよりこころかろしてまそるからず天乃祐を獲るゆへ餘乃さいはひありてながく子孫にさかゆるなり又悪とハのむところハかならず天の示しにはなれざるなりおもひもかけぬうえきにならぶ乃殃あるところ易文言曰積善の家にハ必餘の慶あり不善を積の家にハ必餘の殃ありとみえたり

人有陰徳必有陽報矣

人有陰行必有昭名矣

陰徳とハ人にあらはさず内心にふくみて善道をおこなひひそかにするの徳なり人ハしらざれども天道ハあきらか

必照名矣

信力堅固の門には災禍の雲起ることなし 念力強盛の家には福祐の月光を増

信力堅固門災禍雲無起
念力強盛家福祐月増光

かく吉凶わきまへ陽報をもとめずそのさいはひの報を
ねがはざるなり司馬温公が家訓にも陰徳を冥々の
なかにつみてもつて子孫長久のはかりごとにせよと
みえたり此の句は人として陰行あれば必照名ありといふ
語は淮南子の人間訓にみえたりいふこゝろは陰行とて
身をはなれて道とおこなふ徳行あれば名聞らしく人に
かくさむとすれどもかならず照名とてたかきかうみやうの名があらはれ
あらはれて天下にかくれなし名は實の賓と荘子もいへり
信力堅固此四字は法華経方便品にいでたり信心のふかきわ
かたき人はいかなる大きなるわざはひの起るときもかならず災禍
はきえさりてむなしくなり海篇犀熠に災は天火なり
禍はまかる也災害なりといへり念力強盛とは佛神を念
ずる力のはなはだつよければかならず福祐とは福はさいはひ祐
はたすくるなり易に大有の上九天よりこれを祐く利せざ
ることなしとこの心本文なり福祐を月にたとへ災禍を雲にたと
へたるは福祐をあきらかにひかるにたとへ災禍をくらきにたとへたるなり日本記
神代巻等に神たちさいはひせざるときは災ひといへり信心
の人は天の佑によりて災禍の雲をはらひて福祐の月光を増べし

心の同じからざるは面の如し 乃ち器に随ふ水の如し

心不同如面 譬如水随器

人の心といふものは千万人あつめてもおなじ心のものはなき
なりいはゞ人それぞれ面のいろくかたちのおなじからぬと同じ又人心は
水にたとへてある器とはいれものなり水はやはらかなるもの
ゆへ方なるものにいるれば方なり円なるものにいるればまどか
なるごとく人の心も其ごとく善悪のならはしにかはる
はなはだやすしこの水のたとへはいかなることなり
○左傳に子産曰人心同じからざる其面の如し吾豈敢て
子が面を吾が面の如くならんやと謂また後漢書に尸子云君は

杅の如く民ハ水の如し杅方なるときハ水も方なり杅圓なるときハ水も圓なり

他人の弓を挽ず他人の馬に騎ず

不挽他人弓不騎他人馬

此意ハ他の人乃ざうぐくのたぐひといへども用ひて法にそむけるものとなり弓や馬にかぎるべからずすべてもくのもつくべし○明心宝鑑に太公武王に謂て云他の弓を挽ことなかれ他の馬に騎ことなかれといへり無門関に他の弓をひくことなかれ他の馬にはのることなかれ他の非をべんずることなかれ他のことを知ることなかれといへり

前車のくつがへるを見てハ後車の誡とす

前車之覆後車之誡

前事之不忘後事之師

車の字とおなじこころなり論語の大車小車の注に車の字をば居のこゝろにもちゆるといへり書言故事

此言ハ前車のくつがへるを見て後車のいましめとすべしと書言故事に前代の事をもつてかんがみるを覆車のいましめといふよし晏子春秋に諺曰前車乃覆ハ後車の戒とあり此事ハ後漢書乃賈誼が策にもあり又漢書乃本文のこゝろハ前へゆく車のくつがへるを後よりくる車のみてそのあやまちをしるべしとのこゝろなり藻林に後車ハ騶車なりといへり次の二句乃こゝろハ文選の勸進の表に前事の忘ざるハ後の事の師なりといへり事の忘ざるハ後世の元亀なりとあるごとく前にありし事を忘ずして後の事にいましめとすれバ物にあやまちなく後乃てがゝりとなるなりおよそ此いましめハ万事にかなへるたとへバ殷の紂王のごとき悪王世をみだるハ文王武王成王などの国をおさむるの師範万代の亀鑑なり

善ハ名を立流誉きハまりて名なほ多し

善立名流譽極名猶多

善立とハ善道をよくおこなふよく徳のある人ハその名たかく末代までも流布するなり次の句ハ寵愛されバかならずしもおごりて悪事おほくおこないにハわざはひとなるもの也史記の韓非傳に衛の弥子瑕がきみの車にのり桃乃あまりを君にまゐらせてちやうあいありしかバのちにその二つの事にて大ひなる罪ありとて誅せられてちやうあいのおとろへしハおほかた婦女よりおこれり北齊の高緯帝ハ潘妃といへる美人をあいして周の武帝にほろぼされ周乃幽王ハ褒姒をあいして國をうしなひ唐の玄宗楊貴妃をあいして安禄山がむほんをおこさせつひに位をうしなふこれみなてうあいのいきすぎしまゝゆゑに禍をまねくなり列女傳に陶荅子が妻の云たのしミきはまりてかなしミきたるとなり禮記曲禮に曰おごりをバますべからず欲をバほしいまゝにすべからず志をバみたしむべからずたのしみをバきはむべからずとあり漢の武帝の秋風辞にいはく歡樂きはまりて哀情おほしとてちやうあいおとろへぬればかならずわざはひきたるの和漢ともにその例おほくありけり

人ハ死して名を留め
虎ハ死して皮を留む

○長門本平家物語に祇王祇女兄弟のもの佛といふ女にちやうあいをうばはれて清盛にてうあいおとろへ世乃中をいとひて嵯峨の奥にくさのいほりをむすびおこなひすましていたりけるが佛もやがててうあいのおとろへしをさとりて祇女が菴室にまゐりてともに發心して尼となり源空上人乃佛門に入て後鳥羽院の文治五年二月十五日佛祇王祇女母の刀自大往生をとげしといふあはれなりける

人ハ死して名を留め虎ハ死して皮を留む

人ハ死してかばねハくちはつれども名ハのちの世までのこれバと後代にほまれ汚名をのこすまじきぞ白氏文集に龍門原上の土に骨を埋名を埋ずとあり格物論に虎ハ山の獣の君なりかたち猫に似て大いさ牛のごとく黄なる毛にふるきまだらあり虎の子を豹といふ李時珍が本草綱目にはそのかたちちひさしそのあやといろどる錢のごとくなるを金銭豹といふ裘にほどこしよしとあり虎ハ死してもその皮のみのこりて用らる人として功をなして死しての

のちにその名をとゞむべきことのなり韻府羣玉に王彦章が
人ハ死して名を留め豹ハ死して皮を留むといへるにたがはじ

國を治る賢
王ハ
鰥寡を侮る
勿矣

治國之賢王勿侮鰥寡矣

賢王とハ聖賢の法をまもりて政をたゞしくしてよく国家をおさ
めたまふ君をいへり書經に文王の徳をかゝげてよく徳をお
きらかにし罪をつゝしみてあへて鰥寡をあなどらずとみへたり
鰥寡とハとし六十にあまりて妻なきをいふやもめなり鰥と
いひ五十になりて夫なきを寡といふやもめと寡とのこと大戴
禮にのせたり○孝經云國を治る者敢鰥寡を侮ず而を
況士民においておや孔安國が注云鰥寡の人ハ人の尤疲弱なる
ものなれバなをさらいつくしみてあなどるべからずまして士農工商
とや禮儀とりてほどこすべしといふ事なり王制に鰥寡のことあり
此天民の窮て告ることなき者也といへり

君子人を誉

君子不誉人則民作怨矣

不則民怨を
作矣

君子とハ成徳の名なりと朱子がいへり万葉集にハ君子の字を
よきひとと訓ず大人ともいふなり又ハ道ある王者をいふなり人とハ民百姓をさし
ていふなり君子なる人ハ万民のよきことを我ものとしてほめてたゞしくきうひきべし
そのよきをみとめてほめおくときハ民うらみをふくむのことなり
○禮記曰君子口を以人を誉ざるときハ則民忠を作といふ
を引て覚賢が説あり云按ずるにこの童子教ハ禮記の
おもてをまなびてかく述しなどと義理ハよく叶ひたり君子
なる人ハ口にてほめずしてたゞ人を誉ずとも心より真実底に
おもひをるときハまことあれバ民ハ忠節のこゝろをおこして君とうや
まふなり禮記のこゝろハその理おきらかにしてふかく意味あり
童子教の文ハその義おぼろなりといふべし
○愚按ずるに注家の説不可なるにハあらず本文とあはざる
さかにしてなきにあらざれど上文に君子とあり君子ハ口を以民を欺く
ものにあらず人を誉ざるにけしてなきことをあきらかにせり
けし論語に子張が政を問るに孔子の答にハ君子ハ
恵にして費ず労すれども怨ずとありこれ君子の民

境に入ては禁を問、国に入ては国を問、郷に入ては郷に随ひ、俗に入ては俗に随ひ、門に入ては諱を問、主人を敬はんが為也、君所には私の諱なく、二の尊号なきや、愚者は遠慮なき故に必近憂有べし、管を用て天を窺が如し、針を用て地を指に似たり

とがむなり又朱熹が詩のなかの頃羽人と従ふて功を立て封をべきに卯を刻てあぐり元それまでもあらへるさいとびのさハを従ハずもつて敗をとるところをかく乃ごとくなるべし恐すめざるなり君子とハいはれず

入境而問禁入國而問国

入郷而随郷入俗而随俗

入門而問諱為敬主人也

君所無私諱無二尊号也

他国孔境に入るときハまづ制禁の事どもを問ひその法度をそむかぬやうにすべし国に入てハその国乃ありさまをとひ郷に入てハ一郷の作法にしたがふべし俗とハならハせなりそのところ乃ならひ風俗にしたがふべし人の家の門に入てハその家のあるじ名を問これハその主人とうやまふ禮義なり又君所とハ君の御まへをいふ其所にてハ私の名をいはず二の尊号とハふたつの尊き号なりこの語ハみなひとつにきこゆべし○禮記曰竟に入て禁を問國に入て俗を問門に入て諱を問又云君所に私諱なし大夫の所にハ公諱あり家語云天に二日なく国に二君なく家に二尊なし

愚者無遠慮必有近憂

これハ論語のことばなり子曰人遠慮なきときハ必近憂ありといへり蘇氏が註に人乃ふむところハ足のおける外ハみなむようの地なれどもいま足のふむところバかりとしてすべてそのゆへハ千里の外をとほくおもんぱからざれバうれいすぐさしせまるのうれい足下にありとハこゝろもちのおもんぱかりなきを愚者といふなり

如用管窺天似用針指地

神明ハ愚人を罰す
殺ハ非を懲らすが為なり

師匠の弟子を

管ハほそくつゝのあなより天を見て天ハちいさいとおもひ針を地にさして廣く地ハあさいものとおもふハ天地の大ひろうて深きを知らでちいさき事の狭き事にたとへたるを
そのごとく愚者ハ思慮をなすところハちかくおさなくして深くふかきおもんぱかりハなきなり○莊子曰管を用て天を闚ひ錐を用て地を指すも亦小ならずや

神明罰愚人非殺為令懲

さつくわ神明といふハ本朝鎮護の神といふなり日本記神代巻曰諸の不須鬼神と誅すとみえたり神明ハ邪悪をきらふことのハ罪とまうすへからずされどもそのおろかなる人をふかくおもひはかりてはいましめのためなり易に勧善懲悪あり孔子も郷人の善きものハこれをよしとし其のよからざるものハこれをにくむといへり

師匠打弟子非悪而令徳

打ハ
悪を非を懲らすなり

生れながらにして
貴人も毎に
習ひ修して智
徳を成

弟子といふ字ハおとうと子なりといふ義なり又むかしハ師匠にたいしてハ弟なり子なりといふそのころの字をも師匠より生まるゝ弟子とし師匠と親のごとくうやまふ弟子とするなり師匠ハ親のおもひをなしてものゝ弟や子をそだつるもの、のしきをみてハいましめてゆるすべき事あるべくバ打擲するハあくむにあらずいましめのためにしてまきこりのかうえとおもふぶへなり孔子原壌が足をうちたまひて無礼をとがめられ杖をもちてうちたまひしこれも原壌がふかくそむかずといふ道をすゝむとて折檻したまふなり佛もものゝふりのものをいちはやくせんと涅槃捨拾にとかれたり

生而貴者習成智徳

聖人にあらざればむまれながらにしてたふときものハなき也かくのごとくならひ修して智徳と成し貴き人となるなり論語に学でまなぶ習ふとあり朱熹の註に習ハ鳥のしばしばとぶがごとく程子曰習ハ重習なり

貴者ハ必富不
富者ハ未必

よくまよふ思繹ぬることあり○覚賢が抜書ニ聖人ハむまれながらにしてしるゆへに習修をもちゐず学で道をしるものハ賢人なりこれハ一紀を世間の儒教にまなびてしかなり出世間の道ハ精進乃修習をもつてするなり般若の智徳もこれをもとむるにあるなりといへり○禮記云天子の元子も士なり天下生ながらにして貴者なしとこれ本文のこゝろなり愚謂佛書をみるにすべて智を第一にとなへ儒にハ仁の道を至て大なりとし經書ニ仁をさきとすこの童子教ハもと佛典によるゆへに智徳を貴しとかけるなり孔子曰生ながらにして知る者ハ上なり学て知者ハ次なりとあれバ智徳を成ハ備にいはゆる成人この化才智禮樂備る成人と称すと孟子もいへり

貴者必不富富者未必貴

貴者とハ位たかき人をいふ富者とハ財かきをいふなり位をもてたつとむべきなれどもかならず金銀にとぼしきことありとし、金銀をもちてたりといへどもある人ハ彼らくいきもうしけれども位なきハいやしきことなり源信大師要集曰富者未必貴壽ぞ、いのちながきものハ未必富ずといふ説あり此の童子教ハ富と貴とハ二つながら兼がたき理をさとせるなり○孟子ニ陽虎曰富をもとむれバ仁あらず仁をもとむれバ富ずといへり白氏文集ニ高者ハかならず賢ならず下者ハかならず愚ならずとあり

貴未 この未二ど迄てよむべし

富りと雖心ニ欲多きハ足を名て貧人と為貧と雖心ニ足と欲まさバ是を名て富人とね

雖富心多欲是名為貧人
雖貧心欲足是名為富人

金銀財宝に富ことを足ことを知らざる人ハ欲心ふかくそのうへにこのまよくなくろ不足して常に愁おほく貧人とかもろて足ことを知守銭奴ともまた有財餓鬼ともいやしめいふなりたとひ貧くとも心をよくおさむれバ欲すくなく足ことを知ときハかならずこともむべき憂もなくまくらやすきを福人となづく顔子の貧ましてその楽とおら

師の弟子に訓不是を名て破戒となす
師の弟子を呵責する是を名て持戒となす
悪弟子を畜ふ時ハ師弟地獄に

たちかざるべし然孔子も賢哉回よとほめたまへり佛説
ゆゑを足てる故知ハ第一の樂と涅槃經にとけり

師不訓弟子是名破戒

師呵責弟子是名持戒

此段ハ佛説によりてかゝる志しを童子教のうへにてハ志バ
らく世教にとりてみるべし師匠なる人弟子をよく教訓
呵責とハ志かりせむるをいふよく弟子をいましめて道をおしへ
ずして道理をおしへされバ破戒なり破戒とハ戒を破るなり
ゆゑを持戒といふ持戒とハ戒をまもるなりさりながら菩薩善戒經に
師として弟子をおしへざれバ佛法をおかして地獄に随ると云

畜悪弟子師弟堕地獄

養善弟子師弟至佛果

堕つ善弟子を養ふ師弟佛果に至る

養ふ順不孝子とバ早父母に返

悪弟子とハ毘奈耶論云弟子に五事あらバおいてへいうぢし
ひとつにハ不信ふたつにハ懈怠三ツにハ悪口四ツにハ疾ちハぢ
とおもはず五ツにハ悪知識にちかづくなりといへりそのおしへき
かずのひおけバ師匠も弟子もともに地獄におちいる
なりそのゆゑハ師弟ともに嗔恚をおこしてゆゑなり又よき弟
子とハなにをいへバ師弟ともにこころをあハせてゆへに佛果にいたる
なり地獄とハ一切経の音義に梵語にハ捺落迦といひこ
にハ苦器といふまた不可楽といふまた非行といふ非法
行乃ところなりといへりまた一義に去獄とハけづをのへ名る
をいふなりこの名をつけたりとこれによりてまた罪人と
されひとりにて牢の口に獄のくちとあそておくなり名義集に
地獄と註して地ハ底なり下なりとみへたり

不順弟子早可返父母

不和者擬冤家悪敵加害

可

不和者を寛んと擬すれバ怨敵と成て害を加ふ

悪人に順て避ざれバ緤犬の柱を廻るが如し

善人に馴て離れざれバ大船の海に浮ぶが如し

師匠の教訓にそむきて悪行をなす弟子をバすみやかにその親のもとへかへすべしぜひともいかんしておいてつかはさんことなかれかくのごとくすれバあしざまにかたらいて怨となりてみ師匠を敵のごとくおもふて害をなすものなり寛んと擬すればとハ寛の字ゆるすとよみてゆるさんとする意なり擬ハ議なりそのまへからよくよくとふ義なり

順悪人不避緤犬如廻柱

馴善人不離大船如浮海

悪人にしたがふてそのあしきことをのがれさけずにゐるハ柱につながれたる犬のそのつなをまとふてくるしむバかりにて我身をせむるがごとくつねにあしきことをなしてたちまち災難をうけるなり又善人になれてはなれねバその身の大なる力となりて海をわたるに大船にのるが如しとなり佛本行集経にあげる犬のたとへハこれなり

好き友に随へバ麻の中の蓬の直きが如く悪友に親近すれバ藪の中の荊の曲るが如し

祖を離て疎師に付戒定恵の業を習

随好友者如麻中蓬

親近悪友者如藪中荊曲

蓬麻の中に生ずれバ扶ずともおのづから直しと曽子の謂なり麻ハまつすぐなるものなりこれを善人にたとふ蓬ハそのむまれまがりたる悪人にたとへたれども麻の中にはえたる蓬ハ麻につれてまつすぐなるものなり人もそのごとく直なる人にまじはれバおのづから心をまつすぐになるなり又あしき友にまじはりぬれバあしき八藪の中にはえたる荊のまがりてまがるがごとく我がこゝろもまがりゆくぞとたとへていふなり孔子曰己に不如者を友とすることなかれとあるも益なくして損あるべければなり

離祖付疎師習戒定恵業

根性雖愚鈍好自致学位

根性ハ愚鈍なりとも好めバ自学位に陞る段

袒の字玉篇に父の父なりとあり和訓にハおほぢとよめり但
しこゝにハおほぢかきたるハ一とく渉さして袒といへし
蹤師に付とハおしへをうけそのちゝさうのさき他人の師匠を
まなぶいへとたのミて戒定慧の三学となるなり戒とハ和
訓にいましめとよむなり戒のおほな五戒八戒十善戒三百
五十戒なとゝいふてあまたあれども身と口と意と三ツの事が
第一にて何事にもありとしく身にあしきおこなひなく口にいふことも
あまりとてハ出さず意にあく念んとたくまぬと三学の戒の
とふなりつぎに定とハ天竺のことバにてハ三昧といふ震旦に
て八定といふよく是が本心をとゝのへとまることをさとるの悪
念ふうごかぬと定といふなりくハしくハ景徳傳燈録の弘辯
禅師の説釈氏要覧名義集なとにミえたり又次の句のこゝ
ろハたとひ根性ハにぶくどんなりとも戒定恵の業をまなばバ
それのぼりて三学の位にいたるべしとなり学位の学の字覚の字
をいふ筆者のあやまりうそのゆへハ佛の位を覚位といふなり
天竺に佛陀といふをこゝにハ覚といふ覚位とハ佛果なり

一日に一字を学べ三百六十字　一字千金に当る　一点多生を助く

一日學一字三百六十字
一字當千金一点助多生

一日に一字ずつならひおぼえても一年にはつもれバ三百六十字
なりかならずも字学文学をゆるかせにすまじきとのこゝろなり
但ところによりてハ立春より来年の立春まで凡一年の日かずを
さだむるによりて三百六十日とするなり日本にてハ節分より節
分までに三百六十五日なりされども本文の三百六十字ハ満数
をとりて又五言にかなはぬゆゑに一年といひたるなりとぞいふなり
又ひとつ学問の道ハにハかにいそぎても成就するものにあらず
東破が徐々としてこれをせバ十年乃のちかならずなりて立ざらんと
たゞ久しく積りておそれぬときハ十年にハおのづから成就せぬものハ
なきとなり次の句に一字の價を直段せバ千両の金にあたる
なりとあり史記の列傳に呂不韋といふ人呂氏春秋といふ
書をあらはして咸陽といふ市の門にかけて書物と千両の

一日の師をも疎かに不せざれ 況や数年の師を乎 師者三世の契 祖ハ一世乃睨 弟子七尺去て 師の影を踏不

金とかけおきて此書に一字をそへたりともとりかへたりともする人あらバ千金をあたふべしとかゝれたる故事あり又呂氏春秋の書ハ今に至りて天下の宝となれり又前漢書韋賢が傳に黄金満籯をのこすハ子に一経をおしゆるにしかずとみへたり次に一点多生を助くとハ文字の点一つとれバかへても多生のたすけとなるなり法花霊験傳に法華経の一字をかきたるひとハ已の亡火をうち又硯の水をとりしよりの善根なれども地獄をまぬかるゝ人間にいへる故事あれバ一点多生をたすくるがゆへなりされバ一字を千金万金にもかへがたきものなりとぞ

一日師不疎況数年師乎
師者三世契祖一世睨
弟子去七尺師影不可踏

一日なりとも道をまなびし師匠とたのみたる人をバそまつにするおろかなるに況年久しく教をうけたる師匠の恩ハはなはだおもきものなりまた次に師ハ三世のちぎりといひ親ハ一世乃むすびといへるハ大般若経の中に出家の人ハ師の恩ハ父母の恩よりもおもし在家の人ハ父母の恩師の恩よりもおもしとあり是ハ出家の人ハ仏法修行の道よりいへるなりその心ハ父母ハ現在一生の身をそだて申しなる恩なり佛法の師ハ過去未来現在乃三世乃慧命を申しなるなり七尺さりてとハ人の身のかげハ七尺かとざれバふまぬなり長阿含経および尸迦羅越経には弟子師につかふるに五事を説き○愚按するに師ハ三世のちぎりも祖ハ一世のむすびといふハ釈氏の三世流転の説なればさもあるべしおいて弟子等世教によりて考べし孔子弟子に教ふるに四つを以す文行忠信なりこれ師たるの道なり父母これを養育せざれバ長ずるをえず師匠乃教にあらざれバ人たるの道を知ることなく主君の

観音ハ師教のために宝冠に弥陀を戴く
勢至ハ親孝乃ために頂に父母の骨を戴き宝瓶に白骨を納

ゆゑいかにとなれバ父祖の業をうけそだちしなれバ親と師匠と
主君乃恩ハいづれもおなじく身命をすてゝはうじまつるべきもの
ものなり欒共子が三事の説といふもこのことをいへるなり国語にみえ
たり又七尺去とハ弟子乃うしろにたちて師のかげをふまずとハ
をしまたよき道をおしふるハ師匠といへども辞義すべから
ず孔子も仁に当てハ師に譲らずとのたまへり

観音ハ師教宝冠戴弥陀
勢至ハ親孝頂戴父母骨
宝瓶納白骨

観音ハ阿弥陀如来のおん弟子なりけるがゆへに本師弥陀を
冠のうちにいたゞきたまふハ師恩を頂礼するの義なりとの
こと龍樹の十二礼にみへたり又大日経にも説あり善道大師
の般舟讃にハ天冠の化仏たかさ千里なり慈恩を念報し

てはたまふ頂戴そとみへたり宝冠とハかうべのかざりなり
観音ハ毘楞伽摩尼宝をもつて天冠とすとみへたりくはしく
なるハ八十六観経にとけりその天冠のなかに化仏立たまへ
り その化仏ハいまそたかさ二十五由旬とみへたり勢至ハ父
母孝行のためにかうべに舎利をいたゞきたまふなり宝瓶とハ
かうべのはなり勢至のいたゞきたまふ上の肉髻ハ鉢頭摩花
とのみかうべのはなありと観経にみへたり○一説にいはく
上の文ハ父母の骨を頂戴すといひて又下に宝瓶に白骨
とあらむとハいかゞそれバかりのちがへ人乃注解のことバなりと
と難じたりしかれども此実語童子の二教ハおのづから文
章のよしあしハなく童子等観音勢至の二菩薩を師恩と
たうとみ親の孝養をよくおもひたりやうにさとらせてよ

朝にハ早く起て
手を洗ひ
意を摂て経書
を誦せよ

朝早起洗手摂意誦経書
夕遅寝洒足静性案義理

夕(ゆふべ)にハ遲(おそく)寝(いね)て足(あし)を洒(あらひ)性(せい)を静(しづめ)て義(ぎ)理(り)を案(あん)ぜよ

禮記曰凡内外雞初鳴咸盥漱とありこの段ハもつぱら乃文よりかきいだし童子等日々に休らむべき学文乃義とおもはそうりおしたるハとくおき手とりらひかほあらひて経書をよむべしとあり経書と八出家ならバ経論在家の子ならバ聖賢の書籍なりさて夕ぐれになるとをおそくいねよまづ足をそそぎてバ性とまづめてよみつるふ書物の義理を案ぜよとあり性といふハ人くむまれつき本性ハみな善なりと朱子もいへりその性善のよきとを顔色整齊にして中心式夙興夜寐衣帯必飭○小学云ぐらと学問を修行してよくあくろを明にせよ

習讀ども意に入ずバ破寐て綯を語るがごとし千巻を讀ども

習讀不入意。如醉寐調語

讀千巻不復。無財如臨町

習讀といふ字ハ廣韻に学なりといへりいか程となくひよむともその義理を意にいれずして口にばかりよむハ酒に醉ふし

復せざれバ財無して町に臨が如

てごろの酔ひたるがごとくなり調の字譫文に誤の字とおなじ元次山が寐論に寐中の寢言知ところにおなずといへるなるんの意をさすことなりたとひ千万巻の書をよみならふとも復せずしてわすれてハ銭なくして市町にのぞむがごとくいろいろのものをみてもかふことならざるがごとしなりとなり復の字ハ和訓にかへるとよむかへさねなる

衣を薄うする冬の夜も寒を忍て通夜誦せよ食に乏き夏の日も飢を除て終日習

薄衣之冬夜忍寒通夜誦

乏食之夏日除飢終日習

衣ともうすくきそ冬の夜ハさむさをこらへて夜のあくるまで書物をよみならへとなり誦とハそらによむことなり又食物にともしくて夏の日乃ながき日をもわすれてものの外にそきてこゝらへて日のくるるまでならひおぼへよとなり

醉酒心狂乱過食倦学文

酒に酔へバ人狂乱す
食過るハ愚鈍の催

身を温むれバ睡眠を増
身を安んずれバ懈怠を起

酒とのミてハ本性をうしなふゆへにかゝる人を狂乱するものなり孔子も酒ハはかりなし乱におよバずといましめたまふ
酒ハ佛性を失ふゆへに釈氏にハ大にいましむ善悪所起経といふものにハ三十六乃酒の過をとけりその三十四番の説に身心散乱することありあるひハ資持記に十の過を出し龍樹乃大論に三十五の失をあげたりまことに酒ハ人のおそろしきみだすものなり狂乱といふハ学文をはじむるものハわきまへいましむべし次に食すぐれバねぶりをもよふしかならず懈怠をもようするものなれバ学問修行の人ハあくまでくらふまじきことなりといましむるなり

温身増睡眠安身起懈怠

睡眠とハ玉篇に睡ハねぶりなり眠ハめをとぢてねぶるをなりきるものをあつくきて身をあたゝむれバねぶりをもよふすものなりおよそ稀なるの学を癈し道をさまたぐるハそのゆへおほひなりこれによりて寧子曰

匡衡ハ夜学のねに壁を鑿て月の光を招

ねぶりハ孔子くちたる木のせめとのたまひ那律ハねぶりて釈尊蚌蛤のそしりをおこせり業報差別経にハ睡眠に十二のとがありとときさ発覚浄心経にハねぶりに二十種の過患あるとのべたり懈怠とハかくもんにゆだんしてはげまざるをいふなりおよそ学ハ身をやすらかにしさのこゝろをおけバさくろおこらずしてなまけばかりいぞばらになるなり○菩薩善本経に懈怠ハ衆生乃ことごとくひとつの馬鳴菩薩遺教経論に去懈怠とハ心懶惰のゆへなり睡眠とハ心悶重のゆへなり

匡衡ね夜学鑿壁招月光

史記列傳および漢書列傳ならびに劉歆が西京雑記とあハせてしらべるに匡衡あざなを稚圭といひて東海丞の人なり先祖より農行をはとめきハめて学文をこのまるが家まづしくしてともしびなし壁に穴をうがちてそのとなりのともしびをそのもりきたるにまかりて書をよむそのさとに家とみて書おほくあまたもちたる人ありて匡衡この家にやとはれてかうさくしけるが

孫敬ハ学文の為に戸を閉て人を不通

蘇秦ハ学文のねむりに錐を股に刺て不眠

かゝるねをまたずらにしへに主人おやしきてその志さいをとひしにハ匡衡がいたく功がへくハきみの書をよまんとせしがのぞミなりと主人そのこゝろをかんじ書をかしてあたへしとしかりのちはたして世にかくれなき学者となりし本傳に八月のはなハみくずいまこの童子教に八月のひかりとあるハともしびと月のふぜいにとりし文飾しておけるなるべし

孫敬為学文閉戸不通人

楚国先賢傳にいはく孫敬あざなを文寶といふ楚郡乃人なり学問をこのみて人きたれバさまたげあるがゆへに戸をとぢて人のよびをやめて書をよみ世の人閉戸先生と称せり国君よりめされ候へどもいでゝつかへざりしとなり

蘇秦為学文錐刺股不眠

史記ならびに李氏蔵書の六才名臣傳にくはしくのせてあり戦国策にハ蘇秦ハ雒陽軒里の人なり十年がくもんをはじめて家にかへるに兄の妻はみて…わきよりおきゝしのがれをせずしてをしへてあざむき又妻も機に布をおりてねられどもそのことハその志をとり蘇秦ふかくなげきていたく大夫の位に達せんとおもへバはじめもおれどもこゝろにおさめとてそのうちそこをさりて鬼谷先生を師としてがくもんをむげむをしく書をよむうちにねむきをさせバ錐をもつく足にさしをせり血ながれて足にそそぎしとりて一寸の日のうけのさるをとれしまてなげきあるかどもついにがくもんそのかうそを功にて齊王におはしく丞相とい官にのぼりつくて蘇秦六国の諸侯にちより印書とさづかりこれを佩てそが家にかへるにおよびおはりぬと父母も六十里かどむかひにいでしらず蘇秦おふにわかにむかひそのまことにまみてまとひもとてそりたるにがいままむかひにいでるべくなれておとりてあはよりけんをいまに丞相とい官にのぼり六国の諸侯の印とおびてさかなり名を天下にあげ親おかちまでのくらいぶんとときてしがれまことハむかひにそきたれとことて蘇秦ハまことときさて

いたく里がかく學しんのこころざし八至み嫂のれきどりしてがくなりといへり

孫敬ハ学文の為に縄を頸に係て眠不

孫敬為學文縄係頸不眠

孫敬といふハいまだつまびらかならず右にある孫敬がことおやまりなるか先賢傳に孫敬ががくもんをこのむとき縄を屋のうつばりよりさげてくびにかけねむりをさまさせたることありこれ両段にかゝるハ別の人なるか後勘すべし

車胤ハ夜学を好て蛍を聚て燈と為矣

車胤好夜学聚蛍為燈矣

晋書に車胤あざなハ武子といへり南平といふところの人なりしが幼にしてがくもんをこのめどもまづしくしてあぶらをかはず夏の夜ハうすきぬのふくろのなかへ蛍をあまたとりいれてかんとうし夜を日につぎてがくもんしける博学にしておほくのものにつうぜりその名世にしられたりしかるのちに吏部尚書の官になれり

宣士ハ夜学を好て雪を積て光と為矣

宣士好夜学積雪為光矣

文館詞林文人傳に宣士ハあざなを演侍といへり會稽の人なり代々農行をこのむ家きハめてまづしかりしが夜学をこのまんとすれどもあぶらなしふゆのはるるよにいたりて八雪をあつめそのあかりにて書をよみのちに侍中乃官となれり

休穆ハ意を文に入て冠の落ることを知不

休穆入意文不知冠之落

文士傳にいはく休穆あざなハ周和といへり河陽縣の人なり幼少のときよりがくもんをこのみてのちに宣帝につかへて従事の官になれりはじめ書をよみみちをゆくときも書をよみて手をはなさずあるとき路のほとりにて風ふきてかんむりおちたれどもこれを書にふかくこころがうつりてそのかむりのおちたるをもしらずとなり

高鳳ハ意を文に入て

高鳳入意文不知麦之流

麦を流るゝことを不知

劉寔ハ夜を織口に書を誦して不息

倪寛ハ耕作しても腰に文を帯て不捨

此等乃人ハ皆窮賤を学文を好て文藻国家に波遂に碩学の位に致

後漢書ならびに李氏蔵書に傳あり高鳳あざなを文通といへり南陽業の人なりその家農行ふいとなみしかれどもよくまなぶことに書をよみておこたることなしあるときその妻田のまゝに麦をほしおきて高鳳にまもらせおきてゆくらふとおほせてゆきけるにはかに雨ふりきたりけれども高鳳書によみいりて雨に水がいでて麦をながしけるをもしらずかへりきたりて妻が麦ハいかにとおどろきけれどもおもひいれずしてみなおもひのまゝにゆくにつゐに名儒の誉をとれり

劉寔夜織口誦書不息

廣輿記東昌府の人物類にみへたり晋の劉寔あざなハ子真といへり高唐の人なり家まづしく貧なる牛の衣をおりて世をおくれり博学にして司空の官にいたり崇讓論といふ一巻をつくりて世上の風俗を矯るなし九十二にして死すといへり

倪寛耕作腰帯文不捨

漢書列傳李氏蔵書循良名臣傳等にのせたりくわしくハ倪の字と見ゆるけれども音ハたがひにげいのこゝろなり韻府にハ倪寛に作るこの人ハ千乗の人なり孔安国にしたがつて学問をならふともまづしくて耕作をなしてもまなびて鋤にかけて経を腰にしたりといへり

此等人皆窮賤好学文

これらの人よりまた匡衡より倪寛までの人々とひとしく

文藻波国家遂致碩学位

文藻とハ文章乃ことなり藻ハ海の草の名なり本朝の人正月にかざりとするなり神宮皇宮れ馬のまくらにはさみとするゆへにこのくさを神馬草ともいふなりそのくさみとする紋ありて文章のうきたかく絢なるによるゆへに文藻といふと洪武正韻あるひハ顔師古ハ漢書の註にかけり右の十人の人ハよるもひるもをこたらず学問せしゆへにその名がくにまでひろくきこえて文章が國にも家にもみち満々たり日本記にも家とい

縦簒を塵簡と振とも口に恒に經を彌せよ又弓を削矢を彩とと纓に常に文書を摛

張儀新古を彌せくバ枯木菓を結

縦磨簒振筒口恒彌經論

又削弓彩矢纓常摛文書

みかどと訓ぞその名天子へもきこゆるハ文学の徳の大ひなるなり碩学とハ碩ハ大の義なり大学近に成まうとなり

簒ハ字彙の説どうんぐるに碁を行て相塞を簒といふとあれバ碁の石双六のさいなりたとへ双六などの間なる所作とるとせと口にハつねに經書をよめとなり漢の詩外ハ徒博なりといども学をよのんで世の名賢となりより又弓をけらア矢とちぐせざなるうちにと腰に文書をさゝめとハつねにかくそんのころをするそなといふことなり

張儀彌新古枯木結菓矣

史記列傳を按ずるに張儀ハ魏人なりそどめ鬼谷先生を師としてて学術に已に国々の諸侯へもちいで軍法をときひろめ

亀毫史記を彌そぐれバ古骨膏づくを得矣

矣

なり楚国の王にちかづいて道をとくその相をぬし楚の宰相乃璧とうしなひたるが張儀とくさうたがわれて拷をそこなふこと数百バりせられまねされどもねずまねふきハまりてゆるされしがその妻張儀にむかひおんを書をよみて此のごとくをずバなかるにかくのごとくのなんぎをうくるやといひたりしバ張儀舌が舌とみよありやといふその妻舌ハ口にありとてこたふと張儀舌このかバたんねそろといひたり新古とハ新ハそのちかき代の新書古ハいにしへの書なり枯木菓を結とハ張儀がもとの本とよみバこのまり辯舌乃さまざまをなすと枯木をもおゝうして花さかせしほどのむさぶかうに臣なり○文選云張儀張禄が英雄の辯舌枯言の艶なるハ窮澤をして流を生じ枯木をして榮を發せしむかると榮し一朝に在て能時の厄を濟ふる鏡機子云夫辯

亀毫彌史記古骨得膏矣

亀毛先生といふ人が三寸の舌を發してもとバかりまでも木も花さき一言いひいだせバひさしくさらしたる骨もさてばく

伯英ハ九歳ふして初て早く博士の位ふ列

ゆうゐといふ空海大師れ三教指帰るみゆくりこれハ實ふあり乚人ふあらバ亀るハ毛のなきをのうゝバ亀毛といふくかゝの名をかふ事實るハ儒者を比ていふなり史記とよむとハ史類記類乃書ならべし三教指帰ふ出の亀毛先生乃徳をかちて九經三史心藏ふ括囊し三墳八索意府ふ諳憶せりとあるほどれくいふなり志かれども又外る亀老といふ人ありて司馬遷が史記をよまてこの奇瑞ありしをあるやいまださしかゝるよりどころをしらず

伯英九歳初早列博士位

國朝名世類苑ふ伯英あざなハ長花とそ了琅耶の人なりさし五さいふして文詩をよくはくまり七さいふして經史る達せり事を比てなるハぞとのふ与は九歳のとき元帝ふ仕へて博士となり博士とハむろくもの通達せる人乃官乃名なり百寮訓要抄ふ博士をのせて又文章の博士とふあり正六位下なりとあり應劭漢官儀曰博士ハ秦の官なり博く古今ふ通じ士ハ然否を辯ずと云々

○伯英ハ九さいにて博士となり童子等学文をはとめよや

宗吏ハ七十ふして初て学を好で師位ふ登

宗吏七十初好学登師位

獻徴録ふ宋史ハ幼女のときより年れひるまで耕作をいとなまりありしに七十ほどにてはじめて陳丘といふ人ふ志たがひて学問せりさしみのれバ夜と日ふはひぐくまるびほどれついる大学のかま道をとゝて諸史百家の書ふ通ぜ位三公ふのかまり三公とハ大師大傅大保なりゆふ師傅るのかるときいり日本ふて八右大臣左大臣大政大臣を三公といふなり○宋史七十ふおよびて学問をはじめ天子の師傅となまり世話ふ老てのがくをんなどのふハこふひつじ　朝ふ死ぬるまでも道ハ学べきものなり

智者ハ下劣なりと雖も高台の閣ふ登

智者雖下劣登高台之閣

愚者雖高位堕奈利之底

愚者ハ常住なりとも涅槃之底に墜

智者の作罪ハ大なれども地獄に不堕 愚者の作罪ハ小なりとも必地獄に墜

あくまでハ佛道といへるなれバ佛の戒をまもる者を智者とし
やぶる者を愚者とせし涅槃經に戒をたもつを有智といひ
たもたざるを愚癡とときけり高臺の閣とハ佛果をいへり梵
補天乃中の高樓閣をさしていへり戒行たゞしき人ハさと
ひ下劣なれども十善戒の力にて天上の閣にのぼりてその
ちゑをきはむるなり破戒の人ハたとひ位たかくとも奈落の
底に墜とあり又いはく地獄のことなり梵語にハ泥梨耶と
ありからにハ寄係とも闇城ともいふと祖庭事苑にみへたり

智者作罪大不墮地獄

愚者作罪小必墮地獄

此乃四句ハ大般涅槃經のこゝろなりの文をあげ述べたるに
あるさて又源信如來の往生要集にもこれあり愚忍人のたと
へバ悪をなしてのちにこれをさとるとも大なり智人ハ悪をつ
くるともこれをさとることまたなりたとへバくろがねを火にまく

やけて地におちくるを両人して一人ハ手にとらず一人ハやけ
たるをしりて一人ハしらずさはるものハ手のうちれ
たゞしるものハやぶれてもおくのかく悪をなすもかく乃
おなじく愚者ハしらざるゆゑにことにふるゝがゆへにさとを
うるなり智者ハ悪となくしるゆゑにあやまりてものにふるゝ
ことゆゑにたゞちにそのさとりをとくなりとみへたり
○大藏一覧曰愚者ハ小き衍慾にハ大に報智人ハ重業
なれども却輕償

獄に墜

愚者ハ常に憂を懐く譬ば獄中の囚のごとし
智者ハ常に歡を楽むこと猶光音天のごとし

愚者常懷憂譬如獄中囚

智者常歡樂猶如光音天

正法念經偈曰智者ハ常に憂を懐て獄中の囚に似たり
愚人ハ常に歡樂を猶光音天の如し
一說曰いまこの童子敎にハ右此經文をうつせりされども
うらをとけて筆者の誤か但作者のこゝろへありてかくせるかといへり

父の恩ハ山於高 須弥山尚下 母の徳ハ海於深 滄溟の海還浅

○愚ハ、て本文のうへにて註するに儒に所謂君子ハ憂ず小人ハ懼るのこゝろなり愚者ハ煩悩にせめられてつねに憂おゝかく智者ハ佛道をあきらむるゆへつねに歡樂まへきなり獄と八牢乃ことなり玉篇に出せり囚の字をバ字彙に罪人なりといへり光音天とハ色界十八天乃第六の天なり梵語にハ阿波會といふところにて八光音といへり名義集にくはしく見えたり又従義法師が四教儀の集解に光音天とハ此天をもの言時口よりきよき光といでて音といふハものいふことなり新訳にハ極光天といふ也

父恩高於山須弥山尚下

母徳深於海滄溟海還浅

これより以下十六句乃あひだハ父母の恩をつともいへりけくせるところなり心地観経云慈父の恩高こと須弥山王の如悲母の恩深こと大海の如我若世に住すること一劫二劫に説ども盡ことを能ずとまけるこゝろなり須弥山ハ世界第一の高山なり須弥とも

浅

白骨者父の淫 赤肉者母の淫 赤白の二渧和して

天竺のふるきことバなり梵語に蘇迷盧といふ唐にハ妙高といふなりたかくしてうるはしきゆへなり観経の疏にたかさ三百三十六萬里なりといへり倶舎論にハ八万由旬なりとあり又長阿含経起世経宝積経などにハ八万四千由旬ととくほかの説にハ十六万由旬のたけなり右ハみな佛書の説なり儒乃中に須弥といふハ別なり琅耶代酔篇に崑崙山とさしてく須弥君山といへり皇子年が拾遺記にこんろんざん乃西のかたを須弥山といふとあり滄溟海ハ大海の外にありふかさ九万由旬なりと下学集に出せり東方朔が十洲記に水まろくあをきき色なり仙人これを滄溟海といふとなり

白骨者父淫赤肉者母淫

赤白二渧和成人體身分

ちゝ乃身のしろき骨ハ父の淫精あかき肉ハ母乃淫精なり淫とハ腎精なり赤白の二渧ハ父の精母の血なり渧ハ滴なり和へ

五體身分と成

胎内に處を十月身心恒に苦労そ

和合なり五體とハ筋脈肉骨皮毛といふなりいまこの童子教ハ
佛説なり從義の四教儀に父母の交會赤白二諦此身と
成といへれなり天台大師乃十疑論にもこれあり止觀にハ
頭面四支と五體といふとあれバかうべと両手両の足といへり

處胎内十月身心恒苦労

胎内に處とハ母の腹にやどるといふなり魯齋王栢天地萬物
造化論云天一地二人三三三中て九に加九九にて八十一日
と主る月の數ハ十故に人ハ十月にして生るといへり志かるに五月
七月にてむまるゝもあり一偏にさだまらねバ十月といへるハたいがいに
いきていへバ胎内にやどることとて佛書にもあつかふる多くの
説あれどもことごとくあげるにおよバずさて大般涅槃經云奇哉
我母大苦悩を受十月を滿足し我を胎に懐抱せりといへるに
本文のおほせられたるごとくの懐妊してよりの十月ハあいだおほき
ぬしふはあて身を心ともになやませるそのくるしみいふもおろかや
と人乃子たるものハその恩をおもひゆくべしとなり

胎外に生て數年父母の恵育を蒙

昔在父の膝に居て摩頂を蒙る數年

戯を母の懐に

生胎外數年蒙父母恵育

胎外とハ胎内より外へむまれいでゝのちのことなりおよそ人む
まれて六七歳まで父母にやしなひそだてらるゝといへり論
語乃陽貨篇に子むまれて三年ありてしかふしてのち
父母の懐をまぬかるといひ馬融が註にも子むまれて
いまだ三歳ならざれバ父母のふところに懐抱せらるゝといへり
詩經にも父ハ我を生し母ハ我をやしなふ
また我をやしなひまれをおもそてみしまたときこ
とかへさんとみへたり

昔居父膝摩頂數年

戯伏母懐嘗乳味數斛

昔のあいだハ父の膝にうつぶわらく摩頂をとくいつくしみ
なでさすられてそのあいだせちるまで年ある夜ハ父母のふと

計て乳味を費すを数斛

ふところの中にふして乳をのむをいふなりぞや恩重経に
襁の八斛四斗の白乳を飲とあり佛経の道ども理にあるべし
とくハをちゆる例あり又五道受生経といふに見生て三歳に
二百八十斛の乳を飲といへりかくのごとく云へる佛説なり

朝に八山野に交て蹄を殺て妻子を養ひ暮にハ江海に臨て鱗を漁て身命を資く

朝交于山野殺蹄養妻子

暮臨于江海漁鱗資身命

あしたにハ山や野にいでゝ殺生をして妻子をやしなひも
おくむなり洪武正韻に蹄ハ足なりとあるけだものゝあしを
いふなり又くれにおよべハ江のかはら海へいでゝ魚を漁り鱗
ものゝたぐひをとるなりそのいのちをとりておのがいのちを
たもつるなり○按るに涅槃経に十六種の悪をとくなる
かくのごときのとがといましめなり

旦暮の命を資ん為に日夜悪業を造

為資旦暮命日夜造悪業

而朝夕の味に嗜多劫地獄に堕

而嗜朝夕味多劫堕地獄

旦暮とハあけくれの事なり悪業とハ釈氏にいふ十悪業の第
一とする殺生罪をおかす事なり梵網経乃十重禁戒にも殺生戒を
むじわに謟り嗜とハこのむことなり朝夕の食物に味ひを
このみて異鳥ところをゆへにその業にむくひて多劫のあひだ
地獄におちてくるしみをうくるとなり劫とハ倶舎論に
時のすくなきを刹那といひ時のおほきを劫といへり

恩を戴て恩を知不ハ樹の鳥の枝を枯が如し徳を蒙て徳を思不ハ野の鹿の草を損

戴恩不知恩如樹鳥枯枝

蒙徳不思徳如野鹿損草

人乃恩にあづかりながらその恩をしらざるハたとへバ鳥乃木
にすみながらそのかれをとまる枝を枯しむるが如しとなり華厳
経に恩を知ざるものハ多く横死に遇とあり又人より徳を
うけてそれを徳ともおもはぬハたとへバ野にすむ鹿のその乃

そるが如し

酉夢ハ父を天雷その身を裂く

班婦ハ母を罵て霊蛇其命を吸

ところの草をふんざるが如しとなり智度論に恩をしらざる人ハ畜生より甚しといへり

酉夢打父天雷裂身

岑象求吉凶影響録にのせたり酉夢ハ唐の世乃人なりそのむまれつき不孝なりけれバ夜にいりて家にかへるとて父いかりてちやうちやくしければ酉夢たちまち杖をもつて父のふじをうつそのとき天にハかにかきくもり地しん震動して雷その家にふれちうじが酉夢をはんでそらへのぼり明日その死骸をさがしけるに庭のまへにおちたり人さちうろくみるにせなかに銘ありいはく酉夢打父天報裂身といふ八字なり酉夢ちうとうハ天のむくひをうけ身をさくといふ字なり

班婦罵母霊蛇吸其命

張師正が括異記に班婦はおさなき才幼鐘山に居住せり彼女は母をそしりいつもあらゆる鐘山の巴蛇きたりて

吸

郭巨ハ母を養ハんが為に児を埋て金の釜を得たり

班婦とらふといふ罵ることハ正韻に悪言なり詈なりとしるそりおやとハこれおやを悪口しるそのむくいなり

郭巨為養母埋児得金釜

孝子傳にいはく郭巨ハ後漢の世乃人なり家まづしくてそのうへ老たる母とともなふその妻ひとりの子をうむ三歳になりけれ母食物をあたへて孫にくはせり郭巨その妻にかたりて云ふ家まづしければ母と子やしなひかたし子あるうへにて母とともにすべし子ハまたもうくべきが母ハふたたびみるべからずといへば妻も同心して子をうづまんとす郭巨児をほること二尺あまりにて黄金のつぼの釜を得たりそのふたに銘あり天賜孝子ノ郭巨官不得奪人不得取とあるゆへにおのづからこの釜ハ天より孝子の郭巨にたまはるなりとしるされたりとまたのちまで長く人もとむ○蒙求三綱行

實を按ずるに黄金一釜とかきしるしたるあり釜ハ六斗四升なり論語に子曰これに釜を與よとあり

姜詩自婦と去て水を汲しバ庭に泉を涌す

姜詩去自婦汲水忽庭泉

後漢書にいへり姜詩ハ廣漢といふところ乃人なり母に孝をつくしけるて孝行なり妻も又姑に孝なることいふばかりなし あるとき姑魚の膾をこのミ又井の水をきらひて江漢の河乃水をすきこのミけれバそのみち六七里をへだつれども妻ハ汲ミにあゆみて姑にまいらせけるにあるとき大風にあふて妻かへりおそかりしに母すきの水をのぞミしにとおりそのしきに姜詩はなはだせめてそのまゝさりし妻ハおのれがとがをおもひて富貴なる家にもよめいりもせずして姜詩がとなりへきよりて昼夜に紡ぬひなどして そのことを ほそぼそ死ものの一ならバたれをも名をいはずしてつねに姑へおくりまいらせけり乃老母にあたふることをふかくおもひけれバ姑大ひにによめの志をかんじてよび返しけりそれよりてよめちよとものなかいよくむつまじけれバその乃ちその子に水をくませけるが溺れきここをかなしみ思ひていゑで流れる死しけりかくてその家のかたハら

孟宗竹中に哭て涙雪の中筍を抜

いづみわきいでゝしがそれより毎朝鯉が二疋づゝおどり出ぐるきバまたその膾にしその水と母にすゝめけるとこの故事を李瀚叔が典言といふ書にのせたりの書ニハ姜詩字ハ士遊とあり

孟宗哭竹中涙雪抜筍

晋張方楚國先賢傳にみへたり孟宗が母笋をこのみける母の死してのちに日ごとにそれをそなへまつらんとおもへども時ハ冬の節雪ふかき中に笋生ずべきやうもなく孟宗竹乃なかにいりてなけどもかひなくなきけれバ竹乃子こゝかしこにあらはれいでゝたちまちに母の亡後にまちかけしところのあるとこれ至孝の感ずるところなり後孫彼にいたりて司空といふ官にのぼる

○又異説あり孝子傳に孟仁字ハ恭武といふ江夏のひとなり母にいたつて孝行なりけれバ人々いつれもこれをほむ孟仁母冬のころ竹の子をほしがりけるにまだ冬の月なりまだ生ぜず孟仁竹林にゆきて天にいのりしかバ精霊これをあはれみてたちまちたけ乃子

おひえざるりかくのおしとく二説ありいづれを用ゆべし呉録にハ孟仁あとの名ハ孟宗といへり

王祥歎て氷を叩バ堅凍の上ニ魚踊

王祥歎叩氷堅凍上踊魚

晋書の列傳に王祥あざなハ休徴といへり琅琊臨沂のひとなり継母朱氏ありて子とおもハれざど王祥いよく孝行にしてまつり父母をしやまひあるバ衣のおびをもとかずして湯薬をたてまつりそでまけるその継母なまうをこのみけるころ極寒のおりふしにて水ミなこほりけれバ王祥きるものをぬぎてこほりをたゝきてうをもとむるにたちまちこほりおのづからさけて二献の鯉がおどりいでたりまたあるときそれやまひてたまへる又黄雀をと口乃まされきにおもりまてぐわのおどりてそのまへバ六七十羽かごとんで幕のなかに入これをもてそのさとの人たゞふしぎなりこれまた孝行のかんずるところなりといへり○傳灯日記古事とふ書の中に孝子の詩ありけり継母人間有王祥天下無至今河水上一片臥氷模との詩のよくうれバ王祥が氷池おそれてさむしとして氷乃うへにふしてあたゝめバその氷のとくるをまちけるがいまにいたるまでその川乃氷ハ王祥が臥たるかたちハきえずとなり

舜子瞽叟と涕泣をそゝげバ盲眼を開く

舜子瞽叟涕泣開盲眼

孟子離婁圖解に舜の父ハ目ハありて好悪をわきまへざるゆへに時の人瞽叟と名づくとあり又小説家にハ舜の父實に瞽舜これを舐霍然としてひらくとあり二説あり本文にハのちの義をとりてしるせり孝子傳ならびに史記を按ずるに舜の姓ハ姚あざなをバ重花といへり重花母におくれて父の瞽叟のちの妻をめとり象といふ子をまふく母ハかたくなにて象をあいして舜にハ孝行にのまゝをも後の母悪心をもて舜をころさんと瞽叟にざんげんしてもろともにはからひし舜に倉のやねをふかせけり舜そのあとをさとりて手にふたつの笠をもちて倉にのぼる瞽叟下より火をかけて倉をやく舜ふたつの笠をひらきてとびおりたり瞽叟その死せざるをみて又舜をして井をほらしむほれ舜をうづめころさんとはかりけるときその人そのころをさとりて

舜にはあて他國へにげよといへど舜がいはくこれにて父母にそ
たがひて死して孝となるとも逃れてまた不孝となすべからずとて
さりければ人そのこころをあはれみて舜に銀銭五百文をあたへその
明日井ほりかかるとき舜その銭をわたしてあなの土になしてあぐる父
母これをきくによろこびて欲心に万事をわすれ舜そのをまちふと
なりければ家の井へにげ穴をほりてのがれいでて歴山のふもとに耕て
おくり歳々に三百石の米をたくはへむそのちち父の瞽叟はめしひ
となり母はみみしひとなりて貧困にして又天火に
あひて家をやく舜は継母をみるに薪をうりて飢寒なりてい
なりしかば舜かなしみて食物をあたへ薪をうりにあきなひをましくて
その米のふくろにみなく銭をいれてくはむくれたまふこと
たびくありて瞽叟あやしみてまことにわが子の舜にあらじや
と手をはなにふれてとりて市にいでてついに舜にあひてなのりあひ父子
あひみて悲哭哀傷ちまよふ市の人これをみて悲歎
せずといふことなし舜手をもて父の目をなでて天にいのりてか
なしむにたちまち両目ひらき母の耳きこえ音ときこえ舜の

刑渠は老母を養て食を噛で齢若成

董永は一身を賣て孝養の御恵に依

よくそのまつりごとよろしきにより乃孝順四海にきこえ堯帝その聰明を
きこて天子の位をゆづりたまへり舜その位に在ること八十二載なり

刑渠養老母噛食齢成若

樂史が孝悌録に刑渠は會稽の人なり幼少にして父をうしなひ
ひとりの母をやしなひていたりて孝行なりけるに母に食をすすめる
ごとにまづみづからかみてのちにあたふ母をしやまひおほければ夜を杯
そして看病せり冬は床をあたため夏はゆかをあふぐ朝夕すて
にはくへておだやかをそのへきえたのまはぼ食物をそろへてすすめへに
年七十ばかりなる母なれども三十ばかりにみへしとなり

董永賣一身依孝養御恵

孝子傳に董永は漢人なり家まづしくして人にやとはれて耕作
としう毎日むしろの父を車にのせてひきありきて農行とは
とむかくて父死しけれどその身を主人にうりて錢十貫をかり
それをて父を葬禮してくるとちにみちにてむしろの婦人に

あふそのかへちんとしけれバ董永がはゐとうらんてせんに
をとむ董永主人乃ところにゆきもうすに主人かのきぬ三百匹と
れをおらバ夫妻ともにゆるさんといへバそのつま一月のあひだに三百
匹のきぬをおりまいらせしかバ主人そのはやきをあやしみて二人ともにゆるせり
去るにさて夫にかたりていはくわれハまことハ天の織女なり天帝
きみが孝行なるをかんじてわれをして銭をはらはしむるなりといひて天に
のぼりけり列仙傳にしるせしハ董永が子をば董仲といふ天の織
女乃うむところなり

楊威獨の母と會て虎の前に啼しかバ害を免る

楊威會獨母虎前啼免害

李襲譽が忠孝圖賛に楊威としるしたる人ハ山に入て獵を
せしところの虎きたりてくらはんとするを楊威なげゝく
いはくわれにハとしおいたる老母ありいまわれくらはれなバたれかやしなふべ
きぞといひけれバ虎これをきゝてたちまちにさりしなり

顔烏墓の土を負バ烏啣来て塞埋

顔烏墓負土烏啣來塞埋

廣輿記に十金花府の人物類に漢の顔烏ハ烏傷といふところの
人なり父死して土をおふて墓をきづくに烏むらがりきたりて土をふく
みてこれを墓にはこびそのくちばしみなやぶれたりかるがゆへにその
ところを名づけて烏傷といふなり大明一統志の金花府の陵
墓類にあらはすところに顔烏が墓とのせたるその註をみれバ
義烏縣といふところのひがし四里をすぎて石碑ありといへり
詩学大成の異苑部にハ東陽の顔烏とあり又烏傷といひし
ところを王莽がかへて烏孝といふなれども顔烏が孝行の志によりてなり

許孜自墓を作松栢を植て墓を作

許孜自作墓松栢植作墓

氏族排韻に晋の許孜あざなハ季義といへり東陽の人なり
二親死してのち身もやせほねもあらはるゝまでなげき土
を負て墳をきづくに鹿ありてそのうゑたる松柏乃木を損ず
許孜なきかなしみけれバ明日その鹿たけきもののためにころされて
死したりと廣輿記にあるをりそ乃孝行を感じてその里を
孝順里といふなり大明一統志南畿志なんどのなかにもこの

此等の人ハ皆
父母に孝養を
尽て
佛神に憐愍と

こと葉のせうろ父排韻に晋の元康年中に孝行が世にすぐ
れたりけるに天子より旌をくだされて其近門にたてたりとなり
旌あらしまふ孝行のものあれバ天子より旌をたまわりて門前
にあらハしておくなり○按ずるに許孜といふ人世間流布の本
に許牧とかくハあやまり童子教の本文のまゝを見て松柏植て
墓と作としまうて松柏がひとりて生じてるやうにこゝろうるハ
あやまり松柏を植て墓と作をとよむべしこの註解とあるべし
く訓讀するものに世本にこのたぐひのあやまり多し訂正べし
また松柏とハまつがえの木といふなり盂蘭盆經の新記に
松柏ハすなハち墳墓にうゆるところの樹なりといへり

此等人皆父母孝養

佛神垂憐愍利頻悪成純

此等ハ人と八上の郭巨より以下許孜までの十人といふあらこの
人々ハみな孝行の心あつく父母に孝行せしゆへにその志あつきが

垂て
利頻悪成
純も

生死の命ハ無
常なり
涅槃を欲
で

煩悩の身ハ不

諸佛菩薩天神地祇も感應してそのあはれみをたまハれ
ゆくに心を利をなし成就満足せしむとなり○書經酒誥曰
厥父母に孝養せよ爾雅云父母に善を孝と爲奈法云孝者
畜也謹者謂親に事の道常に畜て心を在と云々

生死命無常欲涅槃

これより已下ハ佛説によりて人間の無常をあらわす三界の
分段生死とうけてこゝに死しかしこれに生じてさだまりなき無
常といふなりるがゆへにすみやかにこのあんとおこして佛果の涅
槃と欲べきなり涅槃とハまづさとりにいたるなり盂蘭盆經新
記に寂滅と翻すといへり生滅なしおつきバ寂滅といふ也
みなそるなれバすみやく生死の苦をはなれて涅槃をうること
又とあり遺教經の第一要にハ因寂と義翻すとあれバ
涅槃とハまよひのけがれなくさとりのあるところといふなり

煩悩身不浄速求菩提

浄なり
遠に菩提を求べし
て

厭ても厭可は娑
婆なり
會者定離の
若あり
恐ても恐可は六
道なり
生者必滅の
悲あり

煩悩とハ心をわづらハしくなやむこゝろなりくハしくハ智度論大
蔵一覧などにくハしく貪欲瞋恚愚癡の三ッにて人の心
をくらやますものにて身を浄からざるなりまたバさとりかんがへを
もて菩提を求べしなり菩提とハ東漢切韻に漢にハ正道と
いひ又覚といへるもの名義集に道乃極をのと菩提と称
するといへり佛果の異名なり

厭可厭娑婆會者定離若

恐可恐六道生者必滅悲

娑婆とハこの世界なり性澄法師の阿弥陀経句解に
かるハ梵語にきやべといふところに八堪忍と翻衆生たへしのび
て三毒といへるを堪忍とのたまへり又祖庭事苑にハ苦忍と
といふともいへり會者定離とハあふものハかならずわかるゝといふ理なり
ハ苦乃なかまにて愛別離苦といふなりかゞゆくるいふてもまたも
いふべきハ娑婆なりしかんとすればあふものハさてはなるゝなり

寿命ハ蜉蝣の
如し
朝に生て夕べに死す
矣

身躰ハ芭蕉の

くハしくハ道バかりつぎに六道とハ地獄道餓鬼道畜生道修
羅道人道天道なりくハしくハ六道講式にみへたりそれても
うまれおそるべきハこの六道なりその中ハ生るゝものハかならず滅す
るなりとまのあたりなり涅槃經偈曰盛者必衰ありて會者別離有り

寿命如蜉蝣朝生夕死矣

蜉蝣ハあしたに生まてくれに死をむしなり李時珍が本草綱
目に一名渠畧といふ蛣蜣に似てちいさしれかひさゆびのか
たちのごとし身せまくして角ありてきいろなり甲の下に浮バ
さいりよくとぶ夏の月雨ふりのちに糞土の中よりむらがり生ず
あしたに生れてゆふべに死すと又ある説に云ふゆうハ水にすむ
虫なりくちばし蠶蛾に似てあしたにむまれてくれに死すと
いへり卓氏藻林に蜉蝣ハ朝にむまれてくれに死をしる人乃長
生するあとこのくハざるれなり

身體如芭蕉随風易壊矣

如し
風に随て壊易

矢

綾羅錦繍も
全く冥途の貯に
非ず

黄金珠玉

芭蕉ハ風にあへバやぶれやすきものなり人乃身のもろきことも
かくのごとしといへり維摩經云是身ハ芭蕉の如く中に堅きこと
有ことなしと説るところなり随願往生經云四大假に合して形
芭蕉の如く中に實あることなしと云く

綾羅錦繍全非冥途貯

綾ハあや羅ハうすもの錦ハにしき繍ハぬいものなり釋名に錦ハ
金なりこれをおるに功をもちゆることそのあたひを金にひとしくす
こと金のごとくなりかるがゆへに字に金と帛とをしたがふといへり
又周禮考工記に五つのいろどりをまじへてあやをなすをにしき
しきと繡文といふなり切韻にハ繍ハ五色の糸をもつて万物
乃かたちをまじへるなり貯とハ洪武正韻に積なり盛なりとあり
これらハあやにしきの衣裳といへどもさらにもつてそれも冥途黄
泉のたくはへにハならざるべきものなり

黄金珠玉只一世財寶

も
只一世の財
寶

榮花榮耀
も
更に佛乃の資に
非ず

官位寵職
も
唯現世の名
聞

亀鶴の契と

海よりいだせるたまを珠といひ山よりいづるたまを玉といふなりこれらのや
珠玉のたぐひハたゞ一生のあいだのたからにてのちの世の重宝とハなるべからずと
なり僞經にハ金銀財宝ハいきてまことの宝とせず善をもつて宝とす
なり本文ハ妻子珍宝及王位臨命終時不随者の文の意なり

榮花榮耀更非佛資

榮花榮耀にふけるときハ道をさまたぐるによつて佛道修行の
たすけにハならざるとなり經に富貴而道を学ぶ事難しといへり

官位寵職唯現世名聞

寵とハ増韵に尊榮なり職とハ玉篇に主なりとありくらゐあるく
らゐある人その職たつとくほまれところなくして人に崇敬せ
らるゝこともたゞ世にかぎりてよきまでの名のきこへなるべし未来の
ためにハならざるなり道をまもり徳をほどこして名の聞ある人とハいふべし

契亀鶴之契露命不消程

紋とも露命の消ざる狂

鴛鴦の衾と重ても身體の壊ざる

契とハやくそくするの義なり夫婦乃ちぎりをむすぶことをいふなり養性
乃みちいきさふあやうんと千歳万歳とくとぬく代〻ふるなり
要集ニ龜鶴ねのち百千のかずありといへり瑞應圖ニハめハ二千
歳とあり本草綱目霜鶴の條下ニ相鶴經とひきていたく鶴ハ
陽の鳥なり百六十年ニして雌雄あひみてめむ千六百年ニ
してをもちとじめてさだまるのんで食ずそるハち胎化なり又
命琰ニいたく龜鶴よく脉とめぐらすゆゑに人ニいのちれほせ
て死することにしる氣なりれおねてをとみへたり次の句乃露命とハ
人乃いのちれもかろきことを法のをとろきふたとへしなり漢丈ニハ
薤上の露ニどとのひ和丈ニハ蕣花のは乃きゆるさかなり
漢書蘇武傳ニ人生ハ朝露の如と龜鶴百千万のいのちれあやう
らんとちぎるとも夫乃身の露の命の消ざてあらんびへうぞとなり

重鴛鴦之衾身體不壊間

鴛鴦の衾とハ夫婦のきそいねるよるれりのふれしの繪とくとらふ
れしとやへわどりかさりのゐ乃よきことのうれバなり本草綱目ニ雀
鵜が古今注を引て云鴛鴦雌雄相離す人其一を獲ときハ一ハ相思
て死すことを疋鳥といふと西京雜記ニ趙飛燕皇后となりて
その女弟鴛鴦のふすまを飛燕ニおくることありと又天宝遺事ニ
玄宗楊貴妃乃契を称して被底鴛鴦といふなりとくれごとく
れしとやのぬきまとゝさ称てふゝぬのちぎりとをいかしれの二ども
この身乃やぶるゝとちねあひざるを比れたのしむとあり老杜が詩
ニも合歡尚時を知り鴛鴦獨宿すといふも文選の古詩ニあと
丈綵雙る鴛鴦あり裁て合歡の被とすといへり

忉利摩尼の殿も遷化の世夢と歎

忉利摩尼殿歡遷化世夢

忉利とハ三十三天のことなり從義法師乃補注ニ三十三天の名
とてゝくるのせられども志げれバ爰に略す 慧琳の涅槃經の
音義ニ忉利天ハ須弥山のいたゞきのうへにあり四方れのくハ
天王あり帝釈あるかんして三十三と合をるといへり又一義云
摩尼とハ如意珠といふ王のことなり因陀羅網とて王の網とうけ
るそのむすびめのたまにをすめ玉乃宮殿なるをハ摩尼殿といふなり

大梵高臺の閣にも大血刀の苦と成

源信大師の観心略要集に因陀羅網は互に相影現するが如くと
あるはこれなり又雑宝蔵経に命終て三十三天の摩尼宝宮殿
中に生ずることを得此宮殿に乗じて善法堂に至るといふ文あり
遷化の無常とは往生要集にかの忉利天のたのしきは快楽
きはまりなしといへども臨命終の時五衰あい現ず一つには頭上
の花のかずらたちまちしぼむ二つには天衣塵垢にけがさる三つには
わきのしたよりあせいづ四つには両目しばしばまじろぐ五つには本居を
たのしまずとこれなり

大梵高臺閣亦[?]大血刀苦

大梵とは梵輔天のならぶ高楼閣あり大梵天と名づくと倶
舎の疏にみへたり火血刀とは三途といへり四解脱経に地獄は
火途道と名づけ餓鬼を刀途道と名づけ畜生を血途道と
名づくあるは三途といへり三毒に對す火途は瞋恚にして
地獄なり刀途は慳貪にして餓鬼なり血途は愚癡にして畜生
なり三藏法數にみへたり又盂蘭盆経の會古通今記に地
獄は日夜をゆるさず火にやかれ餓鬼は草をわけて刀にておどし
たたかひに刀とらひ畜生はたがひに肉をくらひ血をそそぐゆへに血と云なり

須達之十徳も無常を留むることなし

須達之十徳無留於無常

須達とは長者の名なり名義集の長者篇に須達多まくは婆須
達多をといふとあり十徳とは天台大師文句に長者に十徳ありと
いへり一には姓貴とてうぢすじやうよろしきをいふ二には高位とてくら
ゐたかきをいふ三には大富とてざいはうゆたかなるをいふ四には威猛
とてかせのはげしきをいふ五には智深とてちゑふかきをいふ六には年
耆とてとし七十にあまるをいふ七には行浄とておこなひのきよきを
いふ八には禮備とてれいぎのそなはりたるをいふ九つには上歎とてか
みの人に歎めらるるをいふ十には下帰とてしもみなきふくせらるるをいふ
右これらの十徳をそなへて人にそうけいせられたる須達長者も無
常のはらひをのがるることあたはずして死せりとなり

阿育之七

阿育之七寶無贖於壽命

寳も壽命に於て寳にあらず

月支の月を還せ威ある人も琰王の使ハ殺縛

阿育ハ天竺の國王なり名義集帝王篇に無憂王といふとあり七寶とハ一ニハ金輪宝二ニハ白象宝三ニハ紺馬宝四ニハ神珠宝五ニハ玉女宝六ニハ主藏宝七ニハ主兵宝とこれ大象百福荘嚴相経にいでたり阿育王ハ金銀財宝とれほどくらくなる王なりゆへに八万四千乃塔を作らせしことハ八万四千塔記といふにくハしまたわけ日本へもわたり阿育王の塔とてしことは善覚子弥陀偈翼考にあるなり阿育王ハかくのごとくたからをおほくもちられども壽命をのぶることハならざるとなり

月支還月威琰王使殺縛

月支とハ天竺といふなり還月威ある人とハ五通の梵士といふなり法句譬喩經に梵士四人兄弟のものありけれのく五つの通力をえてけり七日のちに四人ながらいのちおはらんを知りてそとふ…ぎりていはく五通のちから天地を反覆し手に日月をとり山をうごかすといへどもいかでか死をまぬかれざらんやと無常の殺鬼とのがれんがため王にいとま…

十王經ハ不入經目録恐ハ僞經歟

あるひ一人ハ大海のなかにわけ一人ハ須弥山のなかに處し一人ハ虚空乃なかにかくれ一人ハ市のなかにまぎれんとしけるが七日の期まんじて四人ともにみなしにけり葉寳のおちるがごとし王このよしをきゝて佛のみもとにいたり作禮して釈尊にこの事を申す梵士四人なから五通をえたりといへども死をまぬかれざりしと仏大王に法を説たまふ人に四の事ありのがれがたし一つにハ中陰のなかにありて生をうけざることあたはず二つにハ生まれて老をうけざることあたはず三つにハ老て病をうけざることあたはず四つにハ病て死をうけざることあたはずと次の句に琰王の使とハ十王経の説に一切衆生命終の時に閻魔法王閻魔卒をつかはして…奪魂鬼と名づけ…奪精鬼と名づけ…縛魄鬼と名づけ…名義集に琰魔あるひハ琰羅といふ静息と翻譯す悪を造ものゝ不善業をとゞめやむるとあり本文の大意ハ月支国の梵士が日月を自由にしわたしたる通力をその威勢むなしくして琰王の使にはかなひがたくくわせられて命をうしなひしとなり

龍帝の殺力も獄卒の杖に打被る

龍帝殺力獄卒杖被打

龍帝がことはあびしのみたは本文のとへるそ八水府のあるじみるべし その力よく龍とうげうつといへども死してハ獄卒の杖に打るる 獄卒とハ地獄の卒なり観佛三昧経に阿鼻地獄に十八獄卒あり 口ハ夜叉のごとく六十四乃眼あり鉄丸をちらす牙ハ狗の牙乃ごとく 牙の端より火ながる八の頭六十四の角あり角の端に火をゆらその火化 して刀輪となり阿鼻城に満といへり

人として施を行はずんば布施は菩提の粮 人最も財を惜まず財宝は菩提の障

人而不行施布施菩提粮

人最不惜財財宝菩提障

布施とハ人にものを施すなり布施に三つのしなあり食施財施法 施なり食施とハ人に食物をあたへいのちをたすくるなり財施とハ 財宝をあたへたすくるなり法施とハ説法して衆生をすくふなりけふに 未曽有経にいへりこの布施ハ菩提にいたるくらゐとなるなり六波 羅蜜の第一檀波羅蜜ハ布施の行なり粮ハ糧の字これを説 文に穀食なりといへり財宝ハ菩提乃障とハ心にかかわらとわしくて 執着をなさバそれはひとへに佛道のさはりとなるなりそれと人に布 施をあたへつて菩提のたすけとなりかてとなるなり三昧経に布 施ハ是慳貪を破の前陣正道に入の初門菩薩能これを行ふ者ハ 則十種の利益を獲とあり布施ハ福徳の資糧と宝積経にいへり

若人貧窮の身にそ布施を可き財なくんバ他の布施をる時と見て随喜の心を生べし

若人貧窮身可布施無財

見他布施時可生随喜心

あの四句ハ諸経要集にいへる文にかりし人まづしくてあるみ 布施しがたくとも他人の布施をするを見てよろこみべく もしよろこぶ心おこれバその功徳布施をする人とおなじきなり随喜 とハまなびしよろこびなり法華経にも随喜功徳品とありて人乃 かけきそうきよくさいきをそうおこなり佛在世の貧女随喜の心 を以て佛に一灯をささげしかハ須弥灯光如来の記別を授かる

悲心一人に施さば功徳大海の如く
己が爲に諸人に施せば報を得て芥子のごとし
砂を聚て塔を爲る人
不黄金の磨を研

悲心施一人功徳如大海
爲己施諸人得報如芥子
聚砂爲塔人不研黄金磨

この文ハ提婆尊者丈夫論の偈なり慈悲心とハ人をあはれむこゝろなり此一人にかぎらず其功徳大海のごとく大ひろし又己が身のために諸人に施すといへども其むくいはわづかにて芥子つぶのごとく小となり

塔とハ梵語にて卒塔婆といへるを略せるなり高顕といふ金剛経の略疏に黄金の磨とハ佛身ハ紫磨黄金のごとくなり金光明経に佛身微妙にして真金色なりとあり此文ハ童子のたはむれにも砂をあつめて塔のかたちをつくりしその功徳にて小善成佛の妙法にあひたてまつりて黄金の磨のごとく佛身となるといふこゝろハ法華経方便品の偈にあり

花を折て仏に供ずる輩ハ蓮に生れ蓮臺の趺を結

一句信受の力も轉輪王の位に超
半偈聞法の徳も三千界の宝に勝

折花供佛生蓮結蓮臺趺

花を佛に供養して功徳とすること諸経にあまたありあげてかぞへがたし花を佛にさゝげるものハ深甚なれバ佛果をさとりて蓮臺に結跏趺坐するなり觀佛三昧経に結跏趺とハ両の足をあはせくむ事なり一華をもつて供養すれバあまたの金臺となりて行者みなそこに住して蓮臺に趺を結ぶとみえたり

一句信受力超轉輪王位
半偈聞法德勝三千界宝

華嚴經曰若一句一偈未曾有法を聞バ三千大千世界の中に満る七寳及釋梵轉輪王の位を得るに勝れりとある文にかなへり一句たりとも佛のおしへを信じて信力にうけ念力にとゞめなば轉輪王の位よりもまさるべし三千世界のあらゆる宝よりも起ことなり轉輪王

勝れり

上ハ須く佛乃道を求(須)中ハ四恩を報じ

しんだいの輪ハめぐるとそみて人とみちびき世をおさむるゆへに
輪王といふなり名義集にふゆ偈といふハ梵語なりあるひハ
偈他ともいふこれハ伽陀といふべき音をたがやまりたるなりこ
れて八頌といふなりまたく乃經ハ五字七字を句と以上つゞき
たると一偈といふなりその一偈ほどこそね半偈の法を聞ても
その功徳三千世界乃宝よりも勝るゞとなり三千界とハ三千
大千世界なりそれとるの日月四天下とわたりて光明のてらすと
ころこれを一世界といふかくのごとく千世界のかずに千の日月
千の須弥山王四千の天下四千の大海四千の悪道千の閻羅千
乃四天下千の忉利天千の梵天にいたることを小千世界といふ
そのごとく乃小千界を千を中千世界といふそのごとく中千世
界これを三千大千世界といふ事ハ阿含經にくはしくあり

上須求佛乃中て報四恩 下遍及六道共可成仏乃

て下ハ遍く六道に及し共に仏乃道を成す可し

幼童を誘引せんが為に因果の道理を注す

上ハ成佛の道とてろろにかくわ生死といゝはなれこと一大事とす
るべしあまと上求菩提なり中ハ四恩を報ずべしとハひとつにハ
父母の恩ふたつにハ衆生の恩みつにハ国王の恩よつにハ三宝
の恩なりくはしくハ大乗本生心地観経にとけり下ハあま
ねく慈悲をもちてせよとハ下化衆生乃まごころなり六道のことハまへ
にしるせりまたハ佛道を成ずべしとハ法界衆生ともにしらしむる
佛道をもとむるこれ大乗心の至極なり法花經にも皆共成佛道と
あるハまことなり廣弘明集にこの三者ハ沙門の大孝なりといへり

為誘引幼童注因果道理

楞伽經に授童蒙とハ注解に童蒙ハ初機といふなりとのたまふ幼
きものハそのたぐひ童子らを善道に誘引せんがためにいふ因果の道理とある
て教とすさまなり因ハ種なり果ハ實なり善因をまけバ善果の實成 悪
因をまけバ悪果をむすぶなり此書ハ只因果の二字を大事とすればなり
○愚按するに登山の児童に庭訓式目書かくさせバその教儒佛に渉
るれども四学の妙理我儒を勝まさせずまづ巻の始に夫貴人の前

内典外典より出る見著誹謗すと勿れ閔者笑を生ぜ不

に居でハとかきらざるハ禮に輿なり中ごろハ專勤学の事とまらして君臣父子兄弟朋友の道とらふて世教に補あることすくなからず末に八合して以因果の道理と注とらふとりて篇を終るられおて作者の本意とあるハせうらくくろろ跡はまてるる時ハ成佛のさそけとなるべし

出内典外典見著勿誹謗

閔者不生笑

内典とハ佛書のこと外典とハ儒書とのこと心を治るを内教といひ身を治るを外教といふと發徴録にもいへり誹謗とハ人共悪を道ることと玉篇にいでたりのこころハ此書ハ儒佛の二道よりのでられたるをぞ見なしておごろまじきことのもおろさうとがむるさざまとなり〇一説曰童子教ハ五大院安然和上の作とされどもうの師乃法を教時問答菩提心義即身成佛義私記などいったうかれバ大義くご是ありといへり〇愚按ずるに此書ハ童子の闇易らんがためかくしてかるるられバおろづち文章の沙汰すべからねれ只讀で一句一言用

ゐすしとをるこそ知ざれバ聖言と侮者に幾をや安然上人乃罪人なりふりくおをハごころあきされ作者の傳とおけうり元享釋書巻四曰釋の安然ハ傳教大師の系族なり母ゆめまらく明星ふところに入とようてそらむてとまり生ざられよひて聡敏人にすぐれてろうもなく叡山にのおせ衣と慈覺の室にいはくろひ顯密の奥秘餘蘊になし又花山の遍昭につきて胎藏乃法とうくいおよそ経論に渉猟し百家に馳騁ととその述作あるところ教時問答菩提心義悉曇章等なり乃至元慶八年にみことれましく元慶寺傳法阿闍梨にみそられたりと云々

童子教諺註 終

實語童子二教註跋

振鷺亭先生嘗閑素をとる。江都とのぐれて武乃多摩川の辺る菴室をトめし。一囗窗下ふ村童を集め習田しむ。實語童子の二教を以す小子弱冠ほて従学し一日先生ろの書を講をるれ時問曰二教頗佛説多し先生へあまを儒家れ士成佛とふこと奈何先生完尓咲曰本邦の兒輩まづ初学れこまを讀こと。ろの朱晦翁が小学乃如くす其例や字学者流よりあまのるまたされ学ふ入の階梯なり。嗚呼你彝を秉を正れ天下れ半学者てうんとれあまが説を與ふ謂べし。小子黙しそ其理を識れねそござれども平日口授をるところ然ひよって窃ふその意を得てやるあり頃日書肆の需る應じ。遂ふ一篇の抄書とす但こまを梓ふ行もんとるハ師の意れあるぼ恐ハ真儒の譏を厭べきり然どもを秋るむとしき童蒙乃爲れさまを傳へんと云爾。

門人　濵專輔　謹識

御成敗式目捷注　風月往来捷注　近刻

法人日用　一寸案文　懐中小本

狂哥題林抄

狂哥闔雲志抄

庭訓往来捷注　江戸往来捷注　出来

夏合延寿袋大成　小本

百人一首彩抄

狂詩通詩選

文化十三丙子年閏八月

江戸書林

両国橋通吉川町　山田佐助

神田松下町二丁目　北島長四郎

本石町十軒店　英　平吉郎

糀町平川二丁目　角丸屋甚助

江府通油町　上総屋利兵衛